



令和4・5年度 幼児教育研究

かけがえのない一人ひとりを大切に ～あったかさに心つながるひかりっこ～



令和6年1月
八尾市
八尾市教育委員会



もくじ

第1章 研究について

1. 研究テーマについて	1
2. 研究方法	3
3. 研究実績一覧	5
4. 育てたい子ども像一覧	7

第2章 各学年の取り組み

1. 0歳児	9
2. 1歳児	15
3. 2歳児	21
4. 3歳児	27
5. 4歳児	33
6. 5歳児	39
7. 一時預かり保育	45

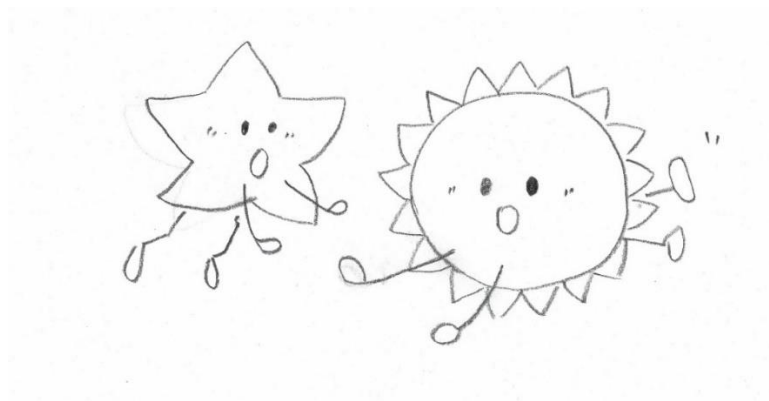
第3章 安中スタイルの研究

1. 保育者の意識の変容	47
2. 安中ひかりこども園の魅力発信	53
3. おわりに	55





第1章 研究について



第1章 研究について

1. 研究テーマについて

(1) 研究テーマの考え方について

子どもたちの豊かな心を育むには、まず、保育者が子どもたちをどういう視点で捉え、その捉え方をもとにどのようにかかわるかが重要になると考えます。また、保育者が子ども一人ひとりの気持ちに寄り添い、肯定的な言葉かけとあたたかいかわりをもつことで、子どもの安心できる居場所となり、自己肯定感や自尊感情が育まれていきます。そして、そのあたたかさで育まれた子どもたちの心に優しさが生まれ、友だちや周りの人たちとかかわることで互いを思いやる仲間づくりへと発展していくと考えています。

保育者の心もちとして一人ひとりをかけがえのない存在として、ありのままのどんな姿もあたたかく受けとめることが大切で、その根底にある保育者の人権意識を高めることが園全体の保育の質の向上にもつながっていくと考えました。

一人ひとりがありのままに自分らしくいられるように、そのありのままの姿を大切に心がつながる園づくりをめざし、子どもも保育者も保護者もあたたかさで包まれる研究にしたいと考え、研究テーマを次のように掲げることにしました。

【研究テーマ】	『かけがえのない一人ひとりを大切に』 ～あたたかさで心つながるひかりっこ～
----------------	--

(2) 1年次の研究成果と園の実態・そこから見える課題

1年次の研究の中で子どもたちを肯定的に捉えることが大切と考え、一人ひとりの思いに寄り添い、子どもたちの自己肯定感や自尊感情を育んできました。また、あたたかい気持ちでかかわることで心がつながる関係性が育まれていくことを、実践を通して学び合いました。

そして、研究を進めていくうちに、保育者一人ひとりの保育に対する意識は変わり始め『学ぶ意欲』『伝える力』『向上心』『保育の質の向上』『人権意識の向上』『同僚性』が身につく、スモールステップながらも保育者自身の保育力が高まったと感じられました。

ここに至るまでには、子どもの姿を保育者が語り合う場をつくり、誰もが発言できる場をもつことや、自分の思いや考えを出し、尊重し合えるあたたかな関係の土台づくりをしていくことも大切にしてきました。そこで、保育者一人ひとりが大切にしたいことを抱き保育にあたっていることや、一人ひとりの保育者が自分の考えを発言する場を経験することで伝える力がより高まることを実感しました。また、学んだことや語り合ったことを“やってみよう”と次の保育に活かす中で“保育が楽しい”と実感することにつながりました。

このように互いを尊重しながら語り、実践していくことで保育者の学びとなり、保育を高め合う同僚性につながっていることを実感し、研究を進めてきました。

また、保育をする中で一番大切な根幹の部分である、保育者一人ひとりの人権意識にも目を向けてきました。人権感覚はこれまでの保育者自身の育ちや経験の中で培われ、人それぞれに感覚をもっています。その人権感覚でかける言葉やかかわりが子どもたちにとって心地よいものであるのかを語り合う中で自分や他者の人権感覚に気づき、より人権意識を高

めていくことをねらいに取り組んできました。そして、本音で語り合うことが園全体の保育の質の向上にもつながっていくと考え、語り合い学ぶ機会をつくってきました。

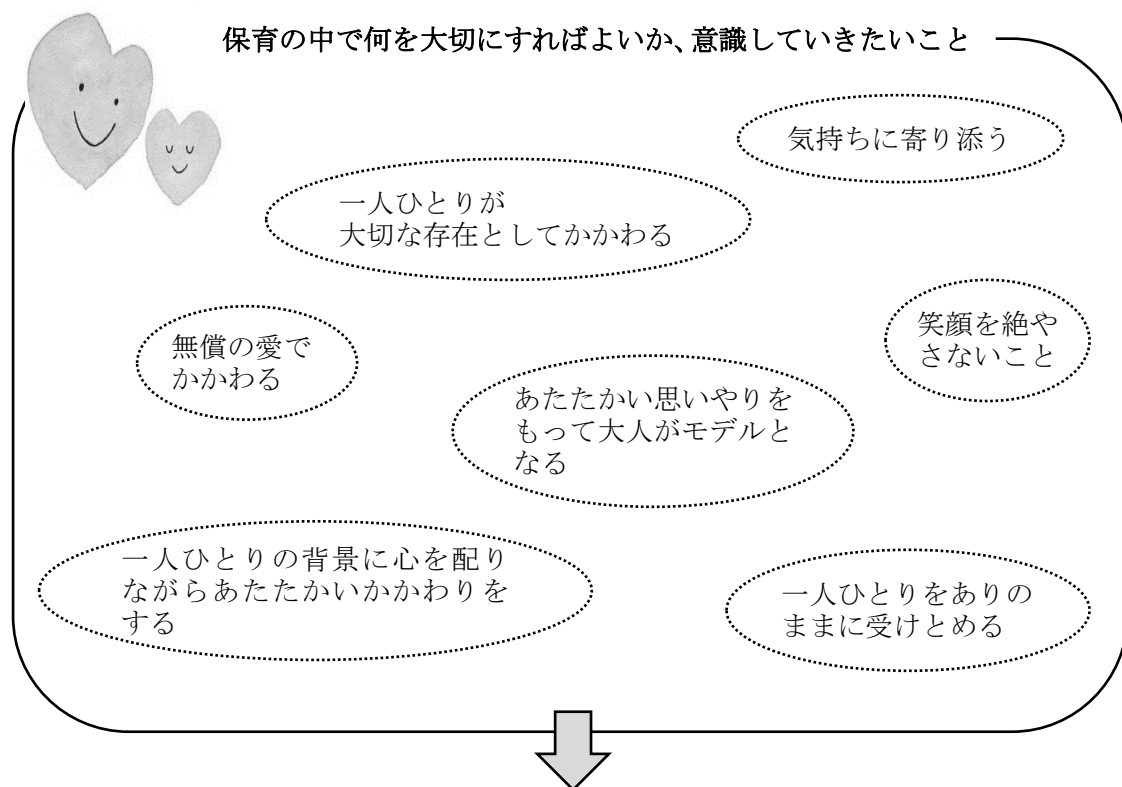
また、1年次の成果より見えてきた課題がありました。第一に、実際に保育者がどのようなにかかわれば子どもたちが大切にされていると感じ愛着関係や信頼関係の中で心の根っこが育っていくのか。第二に、大切にされた子どもたち一人ひとりがぬくもりのある環境の中で伸び伸びと自分らしさを発揮し、周りに優しい気持ちを抱いて心がつながり、あたたかい集団づくりへとつながっていくのか、ということが明確になりました。この課題をもって、2年次は1年次に得た成果を土台にし、さらに磨きをかけながら“保育者がどのようににかかわればあたたかい関係づくりにつながるのか”に焦点をあてて、2年次の研究を深めていくことにしました。

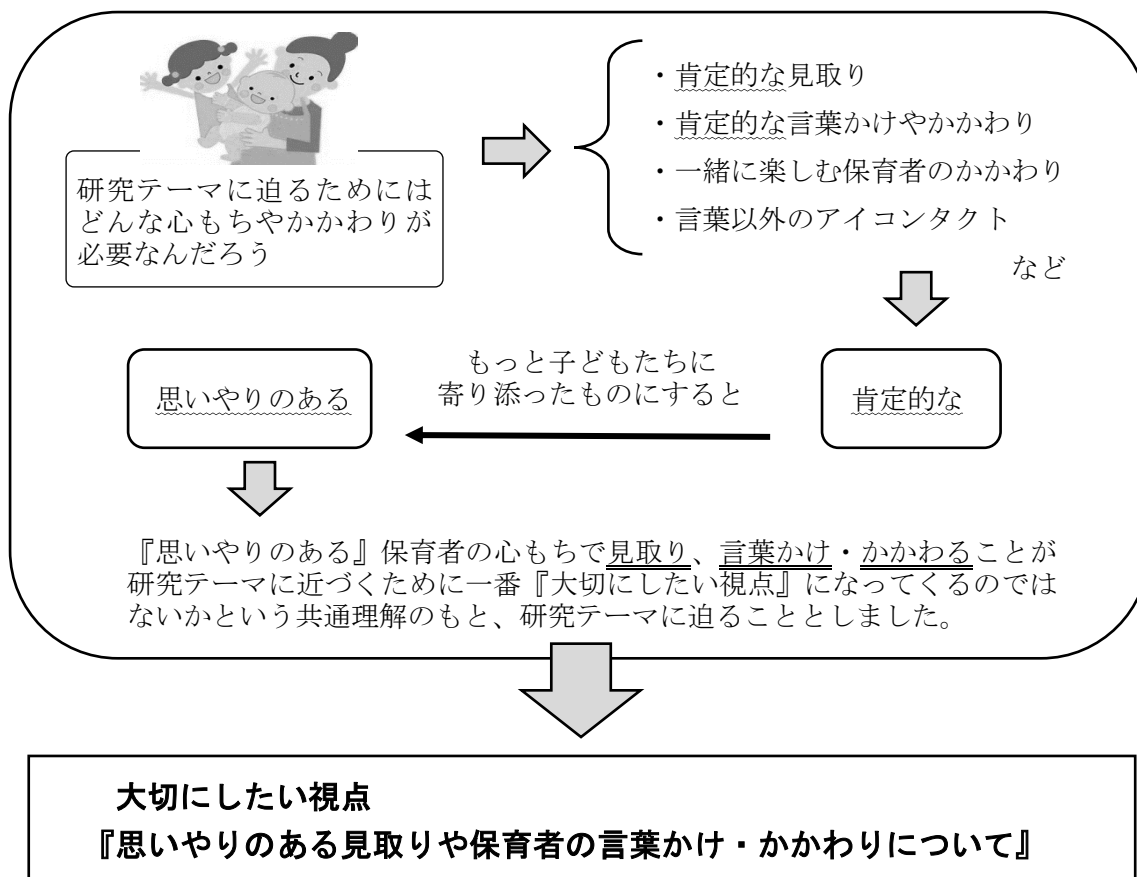
（３）大切にしたい視点について

自分たちが日々の保育を積み重ねていく中で、子どもたちの姿が研究テーマに向かって変容していくことを実感できるように、2年次最初の研究推進会議『きらりん会議』では、研究テーマに近づくために何を大切にすればよいか、意識していきたいことを保育者全員でグループ討議を交えながら話し合いました。

日々の保育の中に明確な視点があることで、輝いてきた子どもの姿がより具体的な姿として見えてくるのではないかと考え、大切にしたい視点を示すことにしました。

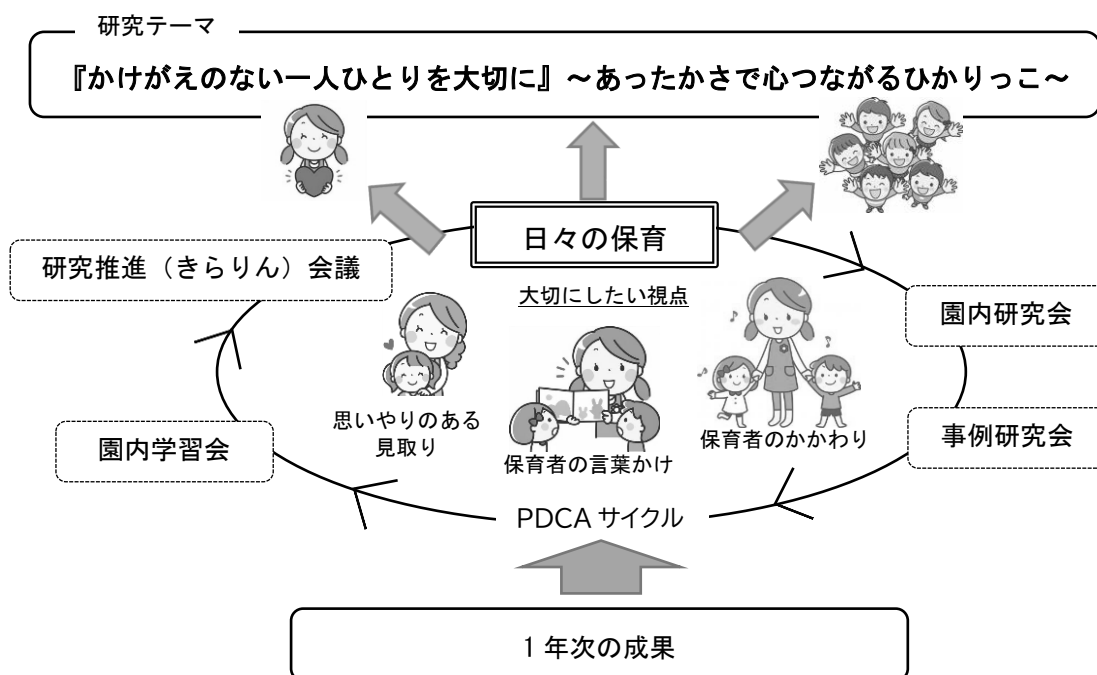
視点に迫るまでのイメージ図（令和5年4月6日 きらりん会議より）





2. 研究方法

1年次の研究成果を土台として、大切にしたい視点で保育を積み重ねてきました。また、この視点で自身の保育を振り返り、一人ひとりの子どもの育ちのプロセスや成長を確認し分かち合うことを大切にしながら実践に努めています。



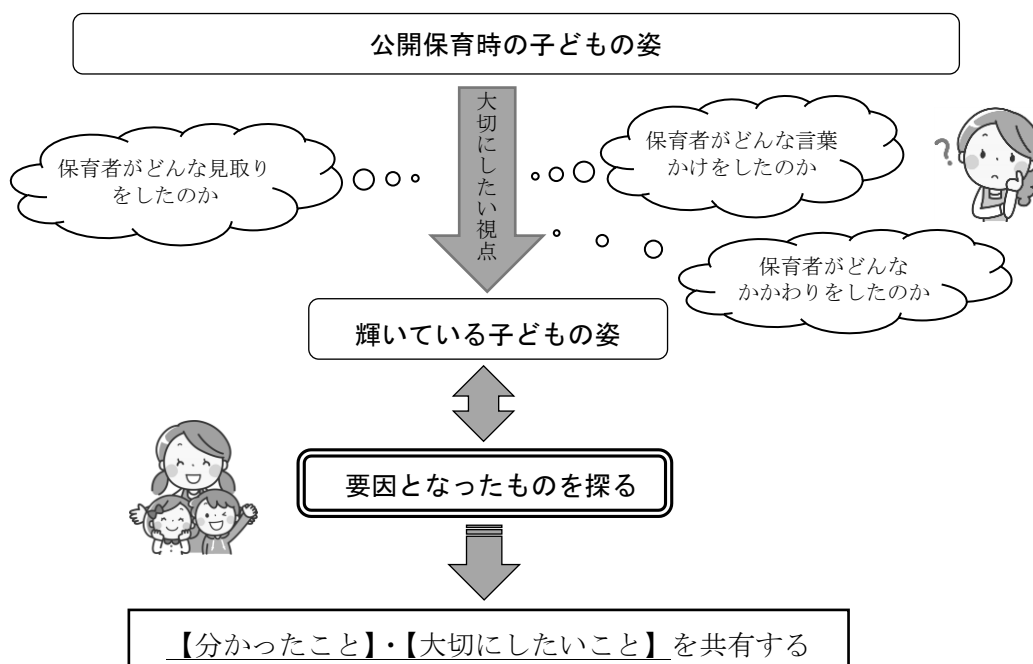
(1) 園内研究会

『大切にしたい視点』を柱にして保育を進めていけるように保育指導案の様式から検討しました。学級の実態では、子どもの姿からどんな思いやりの見取りをして言葉かけやかかわりをしてきたかを記入し、それによってどんな輝いてきた子どもの姿が見られるようになったのかが分かるようにしました。また、思いやりの視点に立った育てたい子ども像に近づくためにねらいを具体的に立て、保育者の援助にも『大切にしたい視点』を意識できるようにしました。その保育指導案をもとに保育を進め、討議の柱でも『大切にしたい視点』を掲げ、参加者と一緒に考え合って討議を深めていくことで輝いてきた子どもの姿の要因となるものを探り、子どもたちのよりよい育ちと保育の質の向上につなげられるようにしてきました。

園内研究会 保育指導案（3歳11月）

3歳 の 育 て た い 子 ど も 像	月 ねらい 週 本日	○自分の気持ちを言葉だけでなく、身振りや手振りなどの色々な形で表現しようとする。	○友だちや保育者と一緒に戸外で身体を動かすことを楽しむ。
		○友だちの気持ちに気づき知ろうとする。	○保育者や友だちとルールのある遊びを楽しむ。
		※もも組：ピンク りんご組：赤 ぶどう組：紫 点シールを名札に貼っています。	○ドングリや落ち葉など秋の自然に触れ、遊びに取り入れたり、つくったりすることを楽しむ。
			○廃材や容器などを使ってつくことを楽しむ。
			○保育者や友だちに思いを伝える嬉しさを感じたり、人の話にも興味をもったりする。
			○園外や異年齢の友だちとかかわり遊ぶことを楽しむ。
			○ドングリや落ち葉などの自然物を使ってつくったり、ごっこ遊びをしたりすることを楽しむ。
			○廃材を使い、つくりたいものをイメージしてつくってみようとする。
			○友だちと簡単なやり取りをしながら遊ぶことを楽しむ。
			○生き物に触れ、命を大切にしようとする。
			○他クラスの友だちともかかわる中で刺激を受けて新しい遊びに出会ったり、興味を広げたりする。
			○自分のイメージしたものを自分なりに表現してみようとする。
			○空き箱や紙芯などの廃材やドングリや落ち葉などの秋の自然物を使って遊ぶ。
			○他クラスの友だちと一緒に遊ぶことを楽しむ。
			○自分の思いを伝えたり、相手の思いに気づいたりする。

公開保育後の討議は以下の流れで行いました。



（２）事例研究会

『大切にしたい視点』で保育実践を積み重ねてきた場面の写真から、子どもの内面を読み取ったり、多面的に捉えたりしながら子どもたちの心の動きを探るようにします。事例を通して様々な見方があることに気づき、保育者の心もちや言葉かけが子どもの成長を支えている要因であることを参加者で共有し、保育の質の向上の機会となるようにしました。

以下の流れで事例研究会を行いました。

- ① 事例提供者は、この事例に至るまでの様子や遊びのプロセスが分かる写真を用意し、実践内容やこの事例のきらりんポイント（思いやりのある見取りや保育者の言葉かけ・かかわり、輝いてきた子どもの姿）について事例研究シートに記入する。
※各学年の事例研究シートについては、第２章 各学年の取り組みをご覧ください。
- ② 事例提供者より、事例の概要の説明をする。
- ③ グループごとに事例研究シートを用いて、参加者全員で自分の見取りを【子どもの心情】と【保育者の思い】の視点で付箋に記入して出し合い、ディスカッションする。
- ④ 『輝いてきた子どもの姿に至った要因』について考えや感じたことを話し合う。
- ⑤ 【分かったこと】【大切にしたいこと】を参加者で共有し、今後の保育に活かす。

（３）研究推進会議（きらりん会議）

第１回目は研究テーマに迫る『大切にしたい視点』について共通理解を図るため保育者全員で話し合いをもちました。２回目以降は日々の保育の中や学年で課題となっていることをもち寄ったり、研究テーマに迫るための課題を共有したりするなど、毎月１回学年の代表者が出席して話し合い、日々の保育実践や学習会に活かせるようにしました。代表者は、各学年からローテーションで参加し、学年でまとめてきた意見を自分の言葉で伝えたり、意見に対して感じたことを話したりする場としました。この代表者は『思いやりシート』（49ページ参照）を作成し、参加月の学習会で実践提案者としての役割も担いました。

（４）園内学習会

“どんな子どもに育って欲しいか” “何を学んで保育に活かしていきたいか” など、年間計画を立て保育者が語り合える場となるようにしています。ここでは必ずきらりん会議の代表者が用意した『思いやりシート』をもとに子どもの姿をどう見取り、言葉かけ、かかわったかを伝え、そのことについてグループで語り合う機会にしました。語り合うことで、自身の保育を振り返ったり、相手の思いや考えを知ったりできる場となり保育の質や人権意識を高め、同僚性を育むことをねらいにしました。

３．研究実績一覧

（１）園内研究会

	日付	学年	討 議 の 柱
1	5/30	5歳児	『思いやりのある見取りや保育者の言葉かけ・かかわり』で輝いてきた子どもの姿とは
2	7/11	1歳児・2歳児・4歳児	
3	11/7	3歳児・0歳児	
4	1/30	全学年（研究発表）	

(2) 事例研究会

	日付	学年	ねらい
1	6/21	0歳児・4歳児	『思いやりのある見取りや保育者の言葉かけ・かかわり』の視点で保育実践を重ねてきた写真から、子どもの内面や保育者の心もち・かかわりを捉えながら子どもたちの心の動きを探る。
2	8/2	1歳児・5歳児	
3	9/6	2歳児・3歳児	

(3) 研究推進会議（きらりん会議）

	日付	内 容
1	4/6	研究に迫る大切な視点について話し合おう
2	5/8	保田先生の講義を受けて実践しようとしていることや学習会で話し合ったことのまとめを共有しよう
3	6/5	5月学習会の感想及びこれからの実践について共有しよう
4	7/3	保育者同士のかかわりで大切だなと思うこと、心がけていることについて
5	8/7	研究冊子の内容について話し合おう
6	9/4	研究冊子について各学年の進捗状況や悩んでいることについて
7	10/12	〃
8	11/6	園内研究会について、冊子について
9	12/4	研究発表について、研究で学んでいることについて
10	1/11	研究発表について

(4) 園内学習会

	日付	内 容
1	4/25	・保田先生の講義を受けよう ・視点「思いやりのある見取りや保育者の言葉かけ・かかわり」を踏まえてグループワークをしよう
2	5/26	・大切にしたい視点を意識して実践した思いやりシートをもち寄って、グループワークをしよう(以降毎月) ・2023年度経営ビジョンの共有
3	6/28	園内研究会(5月)の学びの共有・同僚性についてグループワークをしよう
4	7/25	事例研究会(6月)・園内研究会(7月)の学びの共有
5	8/25	事例研究会(8月)の学びの共有・園長ミニ学習会・研究冊子の内容について
6	9/26	人権学習会(人権擁護チェックリスト)・研究冊子の内容について
7	10/27	研究冊子づくり・研究発表のパワーポイントについて
8	12/20	園内研究会での学びについて・研究発表について
9	2/22	研究2年間のまとめ

4. 育てたい子ども像一覧

令和5年度

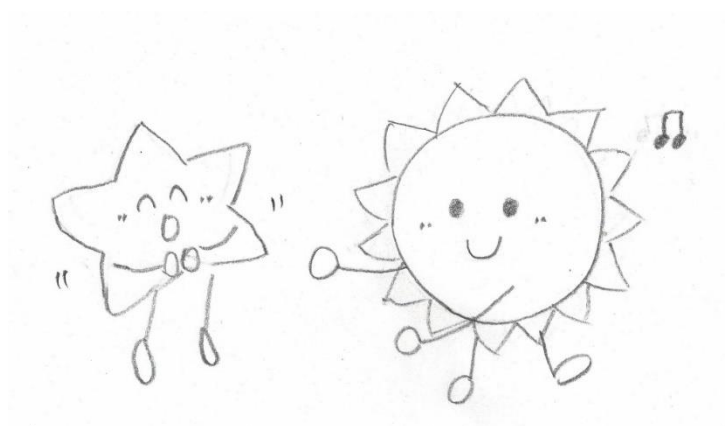
『育てたい子ども像』と『子どもたちに身について欲しい力』と『保育者の心もち』について

	0歳児	1歳児	2歳児
育てたい子ども像	○あたたかいかかわりの中で安心して過ごす子ども ○保育者と信頼関係をむすび、欲求や思いを表す子ども ○安全な環境の中で色々なものや人に興味や関心をもつ子ども	○受けとめてもらうことで、安心して保育者に思いを表現しようとする子ども ○色々なことを体験したり、経験したりすることで興味を持ち、自分から“やってみよう”とする気持ちをもつ子ども ○保育者や友だちと“楽しい”を共有する子ども	○友だちのことが大好き、一緒に遊ぶことが大好きと思う子ども ○伸び伸びと自分の思いを表す子ども ○好奇心旺盛！なんでも“やってみよう”とチャレンジする子ども
子どもたちに身について欲しい力	・大人を信頼し、安心して欲求や思いを出することができる力 ・安心できる環境の中で周りのものや人に興味、関心をもつことができる力	・自分の思いを表現（笑う、泣く、すねる、しぐさ、言葉、表情）する力 ・“やってみよう”“やってみよう”と思う気持ちをもつ力 ・周りの友だちに気づく、興味をもつ力（かかわってみようとする）	・“どうしたの？”“大丈夫？”など子どもたちから優しい言葉をかけることができる力 ・“友だちと一緒に”が楽しいと思える力 ・もの（おもちゃ・生き物など）を大切にする力 ・友だちを応援する気持ちをもつ力 ・嫌なことは“いや”と自分の思いを表出できる力
育てたい子ども像に向けた保育者の心もち	・1対1での密なかかわりをする中で、小さな変化や心情に気づき、思いを受けとめることができるようにする ・職員間の連携を大切にしながら全員の姿を共有し、安心して過ごせる環境を整える ・子どもの興味や関心に合わせた玩具、ふれあい遊びなどを取り入れる	・子ども一人ひとりのありのままを受け入れ、気持ちに寄り添う ・子どもの気持ちを代弁する ・子どもの興味に寄り添い、共感する ・一人ひとりの興味が広がるような環境づくりをする	・色々な経験ができるように遊びをつくっていく中で、“危ない？やめよう”ではなくとにかく“やってみよう”を大切にする ・保育者が楽しく、笑顔いっぱい過ごす ・子どものどんな思いもまずは受けとめる ・優しい言葉かけ、認める言葉かけを意識していく

	3 歳児	4 歳児	5 歳児
育てたい子ども像	○自分の気持ちを言葉だけでなく、身振り手振りなどの色々な形で表現しようとする子ども ○友だちの気持ちに気づき知ろうとする子ども	○周りの友だちや人に関心を寄せ、大切にしようとする子ども ○保育者や友だちを信頼し、こども園が大好きになる子ども ○安心して自分を出しながら、自分の思いを素直に表現しようとする子ども ○自分でできることをしようとする子ども	○互いの思いを気づき合って、育ち合える集団 ○友だちの素敵なおところを見つけられ、自分自身も素敵と思える子ども ○友だちの頑張りや困っている気持ちに共感できる子ども
子どもたちに身につけて欲しい力	・自分の気持ちを表現する力 ・自分の困っていることを保育者に伝えたり、友だちが困っていることに気づき寄り添い、優しい気持ちで保育者に伝えたりする力 ・自分の思いだけでなく、相手の思いを知ろうとする力	・相手の思いに気づく力 ・困っている人がいたら助けあげたり声をかけてあげたりする力 ・優しい言葉をかける力 ・友だちを傷つけない優しい気持ちをもつ力 ・嫌なことがあったら言葉で伝える力（仲間意識・友だちとのつながり）	・自分や友だちのありのままの姿を受け入れ認められる力 ・自己表現・自己発揮できる力 ・どんな場面も友だちの姿にも気づき言葉をかけられる力 ・自分に自信をもつ力 ・相手の立場になって考えられる力
育てたい子ども像に向けた保育者の心もち	・まずは、その子どもなりの気持ちの出し方をしっかりと受けとめる。その後に保育者がこうして欲しいと思っていることや、友だちはこんな気持ちで過ごしているということを伝えるようにしていく	・子どもの素敵なおところや頑張っていたところなどを友だちに知らせる ・子ども一人ひとりの内面を見取りを大切にする ・友だち関係をつなぐ（肯定的な見取り、言葉かけが、認め合う心の育ちへ） ・子ども理解に努め、内面を肯定的に見取る（受容・共感・ともに考え、自信をつける・示唆的になど）	・友だちのことを“大事”と思えるようにまずは保育者自身が“大事”にしているところを子どもたちに分かるようにかわり、子どもたちのモデルとなるようにする ・子ども同士がきりりんポイントに気づけるように振り返りの機会を大切にするとともに、保育者自身の人権感覚を高める ・子どもたちの思いを受けとめながら、保育者の思いも伝えるようにする ・子どもたちに様々な選択肢を提示しながら信頼関係を築いていく
一時預かり保育	研究テーマに迫る保育者の心もちとかかわりについて		
	・子どもたちが安心感をもって過ごせるように、穏やかな言葉かけで笑顔で明るく接し、一人ひとりの気持ちを受けとめていく ・楽しく、伸び伸びと遊べる環境をつくっていくために、発達や興味に応じた玩具を準備し遊びに誘いかけたり、保育者が子どもたちのモデルとなりがかわったりする。また、友だちの気持ちを知ることができるように相手の思いを肯定的に伝え、仲立ちしていく ・保護者との信頼関係を築いていくために、保護者の話を丁寧にきいたり、園で楽しんでいる姿や成長を伝えたりし、ともに喜び合っていく この3つを大切にしていきながら、思いやりをもった優しい気持ちを育てていく		



第2章 各学年の取り組み



第2章 各学年の取り組み

1. 0歳児



育てたい子ども像

- あたたかいかかわりの中で安心して過ごす子ども
- 保育者と信頼関係をむすび、欲求や思いを表す子ども
- 安全な環境の中で色々なものや人に興味や関心をもつ子ども

◇年度当初の子どもの姿への思いやりのある見取り

初めて家庭から離れ、集団生活を経験する子どもたちだったので、保護者と離れる不安感や家庭での過ごし方、匂いや抱かれ方の違いなど、環境の大きな変化に慣れることに時間がかかり、なかなか眠れなかったりミルクや離乳食を拒んだりする姿があった。“とにかく抱っこしてほしい”という思いが強く、1対1でのかかわりを求めて泣いていた。「抱っこしようね」「お腹が空いたね」「眠たいね」「オムツを替えたら気持ちが良いね」などその時々
の状況を汲み取って思いを見取り、あたたかい言葉かけを意識しながら、少しでも早く“安心できる場所”“安心できる人”となれるようにかかわってきた。抱っこをしても泣き続けることもあったが、それだけ不安が大きいという子どもの気持ちを理解して寄り添い、いつも同じ保育者が応答的にかかわることで安心した表情が少しずつ見られてきた。

◇育てたい子ども像への思い

新しい環境の中で不安で泣いている子どもたちとまずは信頼関係をむすび、欲求や思いを出せるようにするために大切にしたいことを担任間で話し合ってきた。担当制保育をベースにしっかりと生理的欲求を満ちし、1対1の密なかかわりをする中で子どもの小さな変化や心情に気づいたり思いを受けとめたりすることで、信頼関係がむすばれてくるのではないかと考えた。担当保育者が『安全基地』になると、周りの人やもの、環境に興味・関心をもつことができると思い、不安から泣いている子どもには「大丈夫だよ」と安心できる声をかけながら抱きしめるようにした。また、遊ぶ時には一緒に笑い「楽しいね」と気持ちを言葉で表し共有することで“先生は私の（僕の）安全基地だ”と心のよりどころになるように日々子どもと向き合ってきた。初めて触れるものに対して少し不安であっても保育者がまず触れ、楽しんでいる姿を見せることで“大好きな先生と一緒に触ってみようかな”と思えたり、保育者の姿を見て“やってみたい”と感じたりできるようなかかわり方を意識してきた。“ひよこぐみが大好き！”と思えるように保育者間で連携し、子どもの成長を共有することを大切にしている。月齢差が大きく生活リズムや食事形態、遊びなどそれぞれの違いに考慮しながら、日々の小さな成長を共有することで、一人ひとりが安心して心地よく過ごせるように心がけていきたい。

◇育んできた取り組み

初めて保護者と離れて過ごす子どもたちの不安な様子を間近で見守る中で、どうしたら伸び伸びと健やかな育ちにつなげることができるのかを担任間で話し合い保育を進めてきた。『育てたい子ども像』の3つを意識して取り組んでいくと次のような順序で子どもたちの姿が変わっていった。

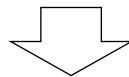
①抱っこして！！

少しでも早く愛着関係をむすび、安心して過ごせるように保育者間での連携を大切にしながら1対1でかかわれる時間を確保できるようにしてきた。生活面では毎日同じ保育者がミルクを飲ませたり抱っこで寝かせたりし、保護者と話しながらなるべく家庭に近い接し方に合わせて無理のないように丁寧にかかわってきた。生理的欲求や抱っこして欲しいという気持ちにすぐに応えられるようにしてきたことで、次第に泣いて過ごす時間も短くなっていった。「お腹空いたね」「大丈夫だよ」と子どもの欲求や思いを言葉にして返していきながら、子どもに寄り添ったあたたかいかわり方を意識してきたことで、少しずつ担当保育者に甘えられるようになったり思いを出そうとしたりするようになってきた。そうした中で、担当保育者との関係が1番安心できるものとなり、担当以外の保育者の少しの接し方の違いに泣いて不快を表現する姿も出てきた。



おいしいね

抱っこして～！



②先生と一緒に！

担当保育者と1対1のあたたかいかわりにより愛着関係ができ、安心して過ごせるようになり子どもたちの興味が少しずつ広がってきた。初めは抱っこから離れられず目の前にある玩具にも目を向けられなかったが“先生と一緒になら…”と玩具に手を伸ばしてみた。保育者の存在を確認しながら探索を楽しんだりする姿に変わってきた。

初めての玩具や感触に対して慎重な子どもには無理に触らせずにまずは保育者が触れて「楽しいね」「気持ちいいよ」と声をかけ“やってみようかな”と興味をもてるように楽しく遊ぶ姿を繰り返し見せるようにしてきた。今では安心できる保育者の元で“やってみよう”という意欲を見せながら周りのものに興味を示して遊び始めている。

先生と一緒に
やってみようかな…

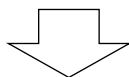


お手で
つないで～♪



一緒に歩いて
みようね

③ひよこ組が第2のお家！



いつも見てくれているという安心感が生まれ、発達とともに行動範囲も広がってきた。十分に動いて遊べる場とゆったり休息の取れる場を確保できるようにするなど、全員が安心して安全に、そして、思いや遊びを十分に満たしてあげられるような環境を考え工夫してきた。0歳児のこの時期に色々な経験をして欲しいと願い、手指を使って遊べるような玩具から、感触や感覚を感じられるもの、体を動かして楽しめる遊具など、発達や興味に合わせて取り入れてきたことで夢中になって遊ぶ姿が見られるようになった。

入園当初から1対1でじっくりとかかわる時間を確保できるようにと、担任以外の保育者も積極的にかかわりをもったことから、遊び面では色々な保育者と笑顔でかかわり人とのつながりや視野も広がってきている。

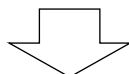


不思議だな〜



おもしろいなあ

ばあ！



④周りにあるものに興味津々！

室内環境を再構成することで、自分で遊びを見つけられるようになり、さらに、歩行が安定した子どもも増えてきて、園内外での探索も活発になってきた。階段や中庭の水道、廊下に置いてある靴箱など何にでも興味を示し、触れてみようとする姿がたくさん出てきている。安全を保障しながらも興味のある物事には、なるべく制限をかけずに楽しんでほしいと願い、見守り援助することで“あれは何だろう”“やってみたいな”と感じて“やってみよう”とする姿が見られるようになってきた。興味は物だけでなく、友だちにも広がってきている。

うさぎさんだよ
かわいいね



安全に配慮しながら子どもの興味に寄り添い、見守る

これ何だろう？

〇〇ちゃんの真似っこ
おもしろーい！



友だちと一緒に真似っこ遊び

実践内容

4月に入園したY児。保護者から初めて離れて過ごす中で不安から泣いて一日中抱っこを求めたりミルクや離乳食が食べられなかったり、眠っても短時間で起きてしまう姿が多かった。生活面で毎日同じ保育者と過ごし、遊び面では担任3人がそれぞれにY児とかかわり愛着関係をむすんできた。その中で担任3人のうちで抱っこや遊びを求める相手に順番ができてきた。

1 場面

担当保育者と過ごす毎日

担任A(担当保育者)



きらきらひかる～♪(子守歌)

昨日よりいっぱい
食べてるね！いつも同じ先生に
抱っこしてもらって
気持ちいいなあ

子どもの思い

保育者の言葉



担任A

先生のことが大好きになったか
ら、ご飯もおいしく食べられるよ！

2 場面

毎日一緒にいることでできてきた愛着関係

(担当の)先生が来るまで
抱っこしているよ
大丈夫だよ

担任B

クラスの先生は
安心できるなあ

職員室の先生

この人誰～！？

3 場面

そして安心できる先生の元へ



職員室の先生

担任C

職員室の先生から
担任を求める姿

担任B



担任C

担任の中でもこっちの
先生が好き♡

担任B

担任A

やっぱり担当の
先生が1番！！

この事例のきらりんポイント (☆思いやりのある見取りや保育者の言葉かけ・かかわり ★輝いてきた子どもの姿)

☆毎日同じ保育者がかかわって生理的欲求を満たし、本児の不安な気持ちを受けとめながら1対1のかかわりを大切にしていた。

☆抱っこしたり膝の上にさせたりして一緒に遊ぶ中であたたかい言葉かけやかかわりを意識して保育を進めていくと下記のような順番でY児の姿が変化してきた。

★①一日抱っこを求めている姿から自分で玩具を触れるようになった。

②本児とすぐ触れられる距離にいと膝の上から降りて興味のある玩具に手を伸ばすようになった。

③保育者の存在を目で確認したり、時々触れたりしながらずりばいやハイハイで探索活動を楽しむようになった。

★担任の存在を認識するようになるとそれまでの不安な泣き方から甘えた泣き方に変わり、泣き声のトーンも変化してきた。

☆担当制を行いながらも遊び面では担任全員が9人の子どもたちとかかわり、一緒に遊んだり優しく言葉をかけたりしながらスキンシップをたくさんとり、愛着関係づくりに努めてきた。

◇事例研究会での学び

【保育者が意識してきたことと愛着関係ができてきた要因】

- ・不安な気持ちを受けとめ、笑顔と優しい語りかけを心がけた。
- ・ミルクの飲ませ方や寝かしつけの仕方など保護者から日頃の様子をきいて家庭と近いかかわりを心がけ、一人ひとりに合ったかかわり方を試行錯誤した。
- ・いつも同じ人が同じ手順でかかわり、生理的欲求を満たして安心できるクラスづくりを心がけた。
- ・行動の切り替え時や離れる時も丁寧で安心できる言葉かけを心がけた。
「ミルクつくるから待っててね」「〇〇ちゃんお待ちせ」「オムツ替えたら気持ちがいいね」
「先生と一緒にいこうね」「(不安で泣いている時など)大丈夫だよ」など
- ・離れていても見守ってくれていると安心感を感じられるように『アイコンタクト』を大切にしました。

【0歳児保育で大切にしたいこと】

- ・自分を大切に思ってくれる人と安心して過ごせるようなかかわりをする。
- ・安心できる環境づくりのために毎日同じルーティンを心がけ、応答的なかかわりをする。

【その後のY児の姿】

- ・担当保育者がいる時は担当保育者の抱っこをずっと求めていたY児。
愛着関係がよりしっかりと築けてくるとY児の中で安心が広がってきたことが分かった。
- ・担当以外の担任もY児の気持ちを受けとめ、スキンシップを図り、かかわる中で愛着関係を築いてきたことで、どの担任に対しても甘えるようになり、思いを表出して一緒に遊べるようになってきた。



◇きらりんワード

第2のお家づくり

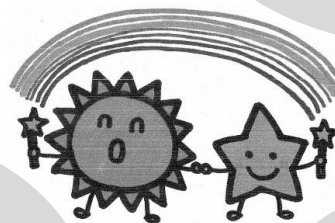
子どもの姿を共有し、
家庭の生活に寄り添った
かかわりを心がける

先生大好き♡

担当保育者が同じルーティン
でかかわり、生理的欲求を満
たしていくことで愛着関係を
むすんでいく

あたたかい見取りと 言葉かけ・かかわり

子どものありのままの姿を
あたたかく受けとめ、一人
ひとりが満足できるような
かかわりをしていく



先生と一緒になら…

初めての経験も安心でき
る保育者と一緒にすること
で、楽しい経験として
積み重なっていく

◇子どもたちの変容

初めての環境の中で不安を感じ、泣くことで気持ちを表現している



「わたしの先生♡」と安心した表情になり遊びも活発になっていく



◇保育者の変容と同僚性

春は園生活に慣れたり生活リズムを整えたりしていく中で月齢差の大きさに悩むことや大変に感じることもあったが、子どもへのあたたかいかわり方を互いに認め合い悩みに共感して取り組んできた。

また、担任間での連携はもちろん、職員室の保育者とも連携してきたことで、欲求にすぐ対応でき子どもにとって安心できるクラスづくりを実現することにつながられた。子どもの成長とともに喜んだり見守ったりする中で担任間だけでなく、職員室とのチーム力も高まったと感じている。

◇この研究を通して分かったこと・これからも大切にしたいこと

- ・まずは家庭での様子をきき、家庭環境に寄り添ったかわりをして、子どもにとっての『心地よい空間』づくりを心がける。
- ・保育者間で子どもの姿を共有し、ありのままの姿を受けとめ、一人ひとりに応じたかわりをするすることで、ひよこ組が安心できる場所となる。
- ・安心できる人と安心できる場所があることで子どもは色々なものに興味を示したり、思いを表出したりして、伸び伸びと生活を楽しみ育つことができる。
- ・担当保育者が同じルーティンでかわり、子どもの気持ちを汲み取って言葉にして返していきながら生理的欲求を満たしていくことで愛着関係が育まれていくことが実践を通して分かった。0歳児は子どもの育ちの基礎となるので愛着関係の土台づくりを大切にしていきたい。
- ・乳児期の間の丁寧な保育を通して、大切にされる経験を積み重ねることで今後の育ちにつながっていくことが分かった。安心・安全が守られた中で伸び伸びと主体的に生活や遊びを楽しめるようになって欲しい。

2. 1 歳児



育てたい子ども像

- 受けとめてもらうことで、安心して保育者に思いを表現しようとする子ども
- 色々なことを体験したり、経験したりすることで興味をもち、自分から“やってみよう”とする気持ちをもつ子ども
- 保育者や友だちと“楽しい”を共有する子ども

◇年度当初の子どもの姿への思いやりのある見取り

進級・新入児ともに新しいクラスになったことで不安感から泣いてしまう姿が多く見られた。また、家庭との生活リズムの違いから、午睡時になかなか寝つけなかったり、寝ても泣き出してしまったりするなどの様子が見られた。子どもたちが不安な気持ちや自分の思いをありのままに出している姿を受けとめ、スキンシップを取りながら言葉をかけ、なぜ泣いているのかを汲み取りながら寄り添った。まずは、担当保育者とのかかわりを大切にし、常に傍にるようにしながら一緒に遊んだり活動したりすることで子どもたちにとって安心できる場になるようにした。そうすることで赤ちゃん人形や保育者とのふれあい遊びなどで遊ぶようになり、近くにいる友だちと同じ空間で遊び始めるようになった。毎日同じ保育者が子どもたち一人ひとりの様子や思いを受け入れるようにし、日々の保育の中で“楽しい”と感じる遊びを一緒にすることで、こども園が“楽しい場所”だと思えるようになり、泣くことが減っていった。また、泣いている友だちを心配そうに見ていた子どもが泣いている友だちの頭を撫でたり、玩具を渡してあげたりする優しい姿も見られた。安心できる保育者が近くにいることで遊びを楽しめるようになり、気持ちの安定にもつながり、笑顔で過ごすことが増えていった。

◇育てたい子ども像への思い

子どもたちが笑う、泣く、すねるなどのありのままの姿を出すことを保育者が受け入れ、気持ちに寄り添い、受けとめることで、安心して自分の思いを身振り手振りや簡単な言葉などで表現できるようになって欲しい。また、草花、野菜、生き物、水、寒天、小麦粉粘土などに触れる『実体験』を大切にしていくことで新しい遊びや活動に興味をもち、自分から“やってみよう”“やってみよう”とする気持ちを育てていきたい。そこで、保育者が子どもたちの発見に寄り添ったり、共感したりすることで、子どもたちがやりたい遊びに気づき、一人ひとりの興味が広がるような環境をつくってきた。好きな遊びを存分に楽しむようになれば、保育者や友だちと一緒に“楽しい”を共有することにつながり、友だちへの興味にもつながっていくのではと考えている。安心できる保育者や友だちがいることで“やってみよう”ことが増え、生活や遊びの中で意欲的に過ごして欲しいと思っている。

◇育んできた取り組み

○気持ちを受けとめてもらう

新しい環境に不安で泣き、遊びに誘ってもなかなか遊び始められない子どもの姿が多く見られた。また、食事や午睡などの時間に自分の気持ちをありのままに出す子どももいた。保育者は一人ひとりが何に不安を感じているのか、どうして泣いているのかを汲み取っていくことを大切にしていた。「寂しいね」「眠たいの?」「お腹空いた?」など、気持ちに寄り添いながら、その時の気持ちを言葉にして意味づけしていった。そして、スキンシップを取りながら、一つずつ不安を取り除いていくようにした。遊び出せない子どもには、保育者が実際に遊んでいる姿を見せ、興味を引き出すようにした。日々の保育の中で、同じ担当保育者や担任がかかわることで、子どもたちにとって安心して過ごせるようにしていった。

変容

☆子どもたちにとって安心できる場になることで楽しんで遊ぶようになった。

☆家族以外の大人に安心感をもち、信頼関係ができて、園生活が楽しくなってきた。

☆園や保育者を安心できる場だと意識しているからこそ「イヤ」という気持ちを態度や言葉で表すようになった。



○素材その物の感触を楽しむ（砂・水・氷・小麦粉・寒天・草花・野菜など）

今まで体験したことがないものを実際に見て触れることで“楽しい”と思う経験がたくさんできるように保育を進めてきた。本物のアジサイを見てから製作遊びをした後、花に触れたりちぎったりして水に浮かべその水に手を入れてみた。実際に水に触れた時、保育者が「冷たいね」「気持ちがいいね」など感じたことを言葉にして伝え、水の感触を楽しんだ。中には寒天や小麦粉粘土など、初めてのものに触れられず、見つめるだけの子どももいたが、保育者が触ったりちぎったりする姿を見せると、少しずつ触れるようになった。周りの友だちが楽しんでいる姿に刺激を受けて遊び始め“もっと触ってみたい”“カップに入れてみたい”などの思いをもって楽しむ姿が見られた。

また、自分たちでトマトやキュウリの苗を植えた。「(土の) お布団かけてあげよう」「お水たっぷりあげようね」などの声かけをしながら日々世話をし、生長を楽しみにしていた。そして実際に自分で収穫して食べた経験から、野菜の興味につながった。

変容

☆“実体験”を重ね“楽しい”をたくさん経験していくことで、自分から遊ぼうとするようになった。

☆友だちのしていることが気になり、見ているうちに刺激を受け少しずつ遊ぼうとするようになった。

☆保育者や友だちと一緒に遊ぶことが楽しくなり、他の遊びにも興味を示すようになった。



○安心できる保育者や友だちと一緒に“やってみよう”とする

色水や色氷などを用意すると、色を混ぜて遊ぶ子どもがいたが、友だちの様子を見ることで興味をもち、少しずつ遊び始める子どももいた。

プール遊びで初めは水を怖がって隅に行き、なるべく水がかからないようにする子どもがいた。大好きな保育者が傍にいて、友だちが楽しんでいる姿を見るうちに少しずつプールの真ん中に行くようになり、水しぶきがかかっても平気になった。遊びを楽しめるようになり保育者と一緒にワニ歩きをしたり、フープくぐりにも挑戦したりして、自信につながった。

変容

☆友だちが楽しんでいる姿を見て、自分からやってみようとする意欲につながった。

☆毎日水に触れて遊ぶことで“おもしろい”“もってやってみよう”という姿につながった。

☆水遊びの経験が自信となり、他の遊びや生活面で“やってみよう”とすることが増えた。



○大好きな保育者や友だちと一緒に遊ぶことが楽しい！

公園で落ち葉やドングリ、木の実などの自然物を個人のお散歩バッグに入れて持ち帰った。ドングリの絵本を置くとみんなで集まって見たり、製作でドングリをつくって壁面飾りにすると、いつも歌っている“どんぐりころころ”を歌い始めたりする姿も見られた。マットの上でドングリを転がして遊んでいると、コロコロ転がるおもしろさに気づいた。その様子を見た子どもたちが、次々に床で転がり始めた。そこで、マットを用意するとどんどん転がり始め、うまく回れない子どももマットの上に友だちと一緒にいることが楽しくなり声をあげて喜ぶ姿も見られた。保育者はさらに遊びが盛り上がる表現遊びにつなげてみよう、運動会で使った草を並べてみた。すると、草の中に子どもたちが入り始め、保育者が「お家みたいね」と言葉をかけると、イメージがつながったのか自ら草を囲い始め、みんなですっぽりと入った。外から保育者の「ピンポン、入れてください」と言う言葉に「どうぞ」と簡単なやり取りが始まった。外にいる子どもが「〇〇ちゃん、みつけた！」と言うと、草の中にいる子どもたちが「ばあ！」と出てきて、かくれんぼのような遊びへとつながっていった。

変容

☆保育者や友だちと一緒に、絵本や実際に見て触れた経験をすることで、子どもたちなりに見立てて遊ぶようになった。

☆友だちの遊びを見て“やってみよう”“楽しい”がどんどん広がっていった。



実践内容

乳児園庭でダンゴムシを見つけたことをきっかけに、2～3人で虫探しが始まった。初めは見ていただけだったが、保育者が手に乗せて一緒に観察すると、触れてみようとする姿が見られるようになった。保育者が虫の立場になりながら声かけをするように心がけ、優しくかわれるように意識してきた。数日後、乳児園庭にカエルが現れた。ダンゴムシにあまり興味を示さなかった子どもも、周りのザワつきが気になり恐る恐る見に行っていた。実物を見てから子どもたちから表現遊びをするようになった。

1

場面

わあ、うごいた…まるまった…

子どものつぶやき

保育者の言葉

ダンゴムシ動かな



...

A児が持っていたコップの中に保育者がダンゴムシを入れた。A児はダンゴムシをじっと見つめ、動くたびに嬉しそうに笑っていた。保育室に戻る時間になるまで観察を続けていた。

2

場面

怖いけど…触ってみたい



ちょっと怖いな

そーっと手に乗せてみる？
ダンゴムシおいでー

まっ、まっ！

葉っぱに隠れたね
びっくりしたのかな

次の日、B児が「ダンゴムシいるかな～」と言ったことからダンゴムシ探しが始まった。保育者が手に乗せているのを見て怖がりながらも「私も触ってみる」と手に乗せていた。保育者が見えやすいようにと、机に乗せたダンゴムシが素早く葉っぱに隠れる姿を見て手を伸ばすC児。捕まえたい気持ちで必死だった。

3

場面

はじめまして、かえるさん

カエルさん見えた？
こっち跳んでくるかなあれはなんだ…
うごくかな

ダンゴムシにあまり興味を示さないD児。みんながザワついてカエルを見ている様子が気になり少しずつ近づいてきた。そこで保育者が、カエルが見えるように抱き上げると鼻の下を伸ばしながら覗いていた。

4

場面

カエルさんケロケロ！ダンゴムシさんモゾモゾ…。



ケロケロ

カエルさんがジャンプ！
すごく高く跳んでいたね

モゾモゾ

ダンゴムシいっぱいいたね。みんなダンゴムシになっちゃった

クラスみんなでダンゴムシやカエルを観察したことをきっかけに、ダンゴムシやカエルの表現遊びが始まった。

生き物に興味を示し実物を見たことで、子どもたちから表現遊びをするようになった。

この事例のきらりんポイント（☆思いやりのある見取りや保育者の言葉かけ・かかわり ★輝いてきた子どもの姿）

☆生き物を見つけたときの子どもの気持ちを言葉にし、一緒に気づいたり共感したりしながらより興味をもてるように援助した。

☆子どもの虫への興味を大切にしながら、保育者が虫の立場になり言葉にして伝えたり実際に触る姿を見せたりすることで、生き物を大切にする気持ちを意識できるようにしてきた。

☆まだまだ力加減が分からない子どももいるため、今後も友達とかかわりや生き物との触れ合いを体験しながら伝えていきたい。

★初めは怖がっていた子どもが、コップを持ってきたり手を伸ばしたりと自分から触ろうとするようになってきた。

★保育者の姿を見て「そーっと」と優しく触ろうとしたり、「可愛い」とつぶやいたりする子どももいた。

★実物を見たり触ったりすることで、子どもたちから表現遊びをするようになった。

◇事例研究会での学び

- ・プランターや落ち葉の下にいるダンゴムシを保育者が見つけ、実際にダンゴムシを手に乗せたり、コップに入れたりして一緒に遊ぶことで、子どもの“楽しい”“おもしろい”“もっと見てみたい”“先生と一緒にだと安心”という気持ちが芽生える。
- ・子どもの仕草や表情、喃語や単語の中にはどのような気持ちがあるのか、一人ひとりの思いや興味を見取って寄り添い、保育者も一緒に楽しむことで安心して過ごせる土台づくりにつながっている。
- ・子ども一人ひとりを尊重し、気持ちに寄り添うことで安心して遊ぶ姿につながり、実物を見た発見や驚きから自分のやりたい遊びを探して遊び、興味や関心が広がっていく。
- ・『大切にしたい視点』である思いやりのある見取りや言葉かけやかかわりから“思いやり”には2つの意味があり、今回の“思いやり”の意味は『相手の気持ちを注意深く考えること』だと学んだ。
- ・生き物に苦手意識をもつ子どもやかかわり方を知らない子どもには、まずは不安な気持ちを受けとめ、一緒に見て観察することから始める。
- ・保育者が実際に触ってかかわり方を伝えたり、友だちが楽しそうにかかわる姿を気づかせたりすることで、少しずつ生き物に対する興味が広がり、生き物を大切にする気持ちが芽生えていく。その経験は、友だちとのかかわりにもつながり、相手の思いに気づこうとする姿へとつながっていく。

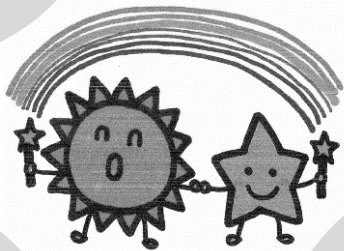
◇きらりんワード

気持ちに寄り添う

一人ひとりの気持ちを受けとめて共感し、尊重することで子どもにとって安心できる場所になる

すぐに対応！

子どもの気づき、発見を
保育者自身も楽しみ
一緒に考える



保育者がモデルに！

保育者自身が楽しみ、
一緒に遊ぶことで
“やってみよう”の
気持ちが芽生える

安心できる環境づくり

安心できる保育者
＋
安心できる場所
⇓

“楽しい”“おもしろい”
“安心”につながる

◇子どもたちの変容

保育者と一緒にいることで
安心して過ごす



安心できる保育者と一緒に
“やってみよう”とする



保育者や友だちとの
かかわりが楽しくなる



大好きな保育者と遊ぶ中で
友だちへの興味が出てくる



育てたい子ども像へ



◇保育者の変容と同僚性

今回の研究で、クラスはもちろん学年での連携がいかに大切なことなのかをより実感した。子ども一人ひとりの様子をその都度共有することで、それぞれの保育観も共有することができ、子どもへの接し方や声かけを今まで以上に意識することができた。また、保育者間でも励まし合い、助け合い、支え合うことで、よりよい保育へとつながっているのではないかと感じた。

◇この研究を通して分かったこと・これからも大切にしたいこと

- ・子どもに寄り添って一緒に遊び“楽しい”“おもしろい”に共感することで、一人ひとりが安心して過ごすことができる場所になる。
- ・安心できる空間での実体験によって“楽しい”を共有することで、初めてのことにも“やってみよう”とする。
- ・子どもの興味や気づきを見取って玩具の用意や保育室の環境を整え、保育者が一緒に楽しんで遊ぶことで“もっとやってみたい”につながり、遊びが広がる。
- ・イヤイヤ期は、子どもたちにとって保育者やクラスを安心できる場だと意識しているからこそその意思表示として捉えていく。そのような一人ひとりの姿をおおらかな気持ちで受けとめ、子どもの主張に共感したり気持ちが切り替えられるような選択肢を増やしたりして、子ども自身が“大事にされている”と感じられるような丁寧なかかわりを大切にしていきたい。

3. 2 歳児



育てたい子ども像

- 友だちのことが大好き、一緒に遊ぶことが大好きと思う子ども
- 伸び伸びと自分の思いを表す子ども
- 好奇心旺盛！なんでも“やってみよう”とチャレンジする子ども

◇年度当初の子どもの姿への思いやりのある見取り

年度当初は、新しい保育室や保育者に戸惑いや不安を感じる姿が見られ、言葉で思いが伝えにくいこともあり、なかなか落ち着けず、感情を十分に出し切れない姿があった。まずは、保育者自身が子どものそのままの姿を肯定的に捉えて“不安になるのは当たり前”とおおらかな気持ちで受けとめた。また、楽しいと思える空間や生活にするために、担当制保育で一人ひとりと丁寧に向き合い、信頼関係を築くことに努めた。そうしたことを続けていくうちに、見覚えのある玩具だけでなく、目新しい玩具にも気づくと、興味が向き“楽しいことみつけた”というような表情が出てくるようになった。また、保育室とは違う新しい発見ができる場所として大きな園庭に出る機会も増やし、景色や自然に触れ砂や泥の感触を味わっていくと、広い空間に喜び身体を動かす開放感も合わさって、言葉や仕草で気持ちを伸び伸びと表出する子どもの姿が見られた。

◇育てたい子ども像への思い

2歳児ならではの“イヤだ！”という気持ちをしっかりと出して欲しいという思いから、イヤを出せた時には“おっ、いいね!!”とおおらかな気持ちで子どもとかかわるようにしている。また、思いをうまく出せない子どもに対しても安心して自分の気持ちを出せるように寄り添い、受けとめてもらえたという経験から保育者のことを信頼してどんな思いも表出できるようになって欲しいと思っている。友だちの存在が気になり始める時期なので、一緒に遊ぶ楽しさを味わい“友だちが大好き”という気持ちをもって欲しいと思い、まずは保育者が一緒に遊びに入り友だちと過ごす楽しさを感じられるようにしたり、子ども同士をつなげたりしている。また、一人ひとりに対し、優しい言葉や認める言葉などあたたかい言葉の“シャワー”をかけることで、友だちに対して「どうしたの?」「大丈夫?」や「ありがとう」など、思いやりをもって自然とかかわる姿が身につくように欲しいと思っている。

生活面や遊びなどでは“自分でしよう”“こんなんしてみたい”“やってみよう”という気持ちを育てるため“できた!”につながる経験が積み重なるように保育者間で連携し環境づくりをしている。その中で“できるかな?”と思うこともすぐに“やめとく?”ではなく『とにかくやってみよう精神』を大切にしている。たくさんの成功体験を重ね、初めてのことに好奇心旺盛でチャレンジする子どもになって欲しいと思う。

◇育んできた取り組み

○友だちのことが大好き、一緒に遊ぶことが大好きと思う子ども



担当制保育のもと、クラスではグループで過ごす時間が多かった。友だちの名前を口にすることもあったが「先生がいい」「先生と遊ぶ」など、保育者とのかかわりを求める方が多く、友だちが遊びに参加しようとする、あまり乗り気ではない姿が見られた。

また、思い通りにいかないと、泣いて怒って友だちの話をきこうとしなかったり、思いを通そうとしたりして自己主張も数多くあった。その都度保育者が間に入り思いを仲立ちするがうまくいかない時もあった。

「○○の！」という自分の物にしたい思いや「とった」「とられた」などの強い主張をすることも多かった。

<援助>

子ども一人ひとりの姿を丁寧に見取ることから始め、保育者が遊びに積極的に参加した。また、子どもの興味を引き出しながら一緒にすることの楽しさを感じられるようにした。

変
容

<援助>

お休みの友だちを問いかけたり「2人で○○してみる？」と誘いかけたりし、友だちを意識するような声かけやかかわりをして子ども同士をつなげてみようとした。また、嫌なことを伝えること、気持ちを言葉にして表すことなど、友だちに対してのかかわり方をくり返し伝えた。



夏の感触遊び、プール遊び、運動遊びをきっかけにクラス全体での取り組みが増えていくと、友だちとのかかわりに変化が見られた。触り心地を保育者に伝えるように、友だちにも「ベタベタやな」と話しかけて共有してみようとしたり、友だちの遊ぶ姿を見て「○○してるな」と言ったりして気にかけるようになった。その中で、同じ遊びをしている子ども同士で、保育者としてのような簡単なごっこ遊びのやりとりが見られた。

友だちの話をきこうとする姿も出始め、欲しい玩具が重なった時には「今使ってる」「あとでね」などと、言葉で伝えるようになった。

イメージやつもりに違いはまだまだあるが、うまく一致した時には互いに笑い合い、嬉しそうな表情を浮かべている。

○伸び伸びと自分の思いを表す子ども



登園時の母子分離や保育室以外の場所に行く時に泣いてしまい、保育者に抱っこされてもなかなか落ち着いて過ごすことが難しかった。不安感が強く、保育者の声かけに対して泣いたり、何をしたらよいかわからず戸惑ったりしていた。好きな遊びを見つけると遊べるようになりイメージしたものを形にしようとしたり、それを保育者に伝えたりするようになった。同じ遊びの中で少しずつ友だちの存在に気づくようになってきたが、玩具の取り合いや友だちの言葉に圧倒されて泣くこともあった。



<援助>

安心できる場所になるように不安感に寄り添うことを根気強く続けてきた。安心できる肯定的な言葉を意識して言葉がけをし、スキンシップをとることで、信頼関係を築いてきた。好きな遊びを見つけれられるようになってきたため、まずはじっくりと遊ぶ時間を保障した。じっくりと一人で遊ぶことで気持ちが安定し、泣くことも少なくなった。

変
容

<援助>

好きな遊びをする中で発見や発信を見逃さず共感し、保育者間でその姿を認め合うようにした。同じ遊びの中で友だちと一緒に遊ぶようになったが、言動に圧倒されその場を離れたとかかわりを避けたりする姿が見られた。友だちに対しても自分の気持ちを出してほしいと思い、トラブルになった時こそチャンスと捉え、気持ちを代弁し相手に伝えたりやりとりの仲立ちをしたりするようにした。



自分の思いを出せるようになり、嫌なことやしたくないことがあると“イヤ！”と保育者や友だちに言うようになった。また、担任以外の保育者にかかわりに行ったり友だちの遊びに入ったりと周りの環境にかかわるようになった。ある日、知っている音楽が流れると自分から身体を動かし表現し始めた。そこに集まってきた友だちと一緒に簡単なごっこ遊びが始まった。“先頭になりたい”“もう一回したい”などの思いも伝えられるようになり、一緒に遊びを楽しむようになった。



○好奇心旺盛！なんでも“やってみよう”とチャレンジする子ども



“やってみよう”という気持ちはあるが初めてのことへの不安や怖いという気持ちから諦めてしまうことがあった。また、できることでも自信がもてずいたり、やりたいという気持ちになれなかったりする姿もあった。

<援助>

子どもが“やってみよう”と一歩を踏み出すために、安心できる環境を構成してきた。

変
容

<援助>

簡単なことから取り組めるようにしたり、手を添えたり、保育者とやってみることで自信をもてるようにしてきた。



手伝って欲しい時に“先生一緒にしよう”と子どもから伝えるようになり自分でできることが増えてきた。初めてのことに不安を感じていた子どもが“保育者と一緒に”を経験したことで遊びに対して自信がつき“見ててな！”と意欲をもって取り組むようになった。

“自分の気持ちを受けとめ、寄り添ってくれる大好きな先生となら！”と不安や怖い気持ちを乗り越えて“やってみよう”という気持ちが芽生えている。“先生と一緒に”を合言葉に自信につなげてきたからこそ今は“自分で！”“友だちと一緒に！”という姿が見られ、周りへと視野が広がってきている。

園内研究会での保田先生の指導助言より…

<子どもの姿>

身の回りのことに対して意欲がなかったり、紙パンツから布パンツへの移行をしたくないと言ったりする子どもがいた。また、できることでもその日の気分により「しない」「やりたくない」という気持ちに変わることもあった。

保育者の思い

毎日の援助悩むな～
自分でできるようになって欲しいな～



<指導助言>

- ・子どもの思いに寄り添いながらも保育者の思いも伝えていく
- ・選択肢を使い自己決定できるようにする

変
容

<保育者の援助と子どもの変容>

まずは子どもの気持ちを尊重し、無理なくしたいことができるようにした。そこから少しずつ子どもたちが自分で選べるように選択肢をつくってきた。すると、子どもの中でこれならできると思えるものを自分で選択し“〇〇やったらやってみる”と保育者に伝えるようになった。子どもの気持ちを第一に考え、さりげない援助で“できた！”を積み重ねてきたことで“自分で！”という姿が多く見られるようになった。



実践内容

本児は、言葉で思いが伝えにくいこともあり、困ったことや嫌なことなどがあると大声で叫んだり、泣いたり、投げたりすることで表現していた。床や壁に頭をぶつけたり、つばを吐いたり、友だちに手が出ることも多く見られた。担当保育者を中心に担任が本児の思いに目を向け寄り添いながら、危険なことや友だちを傷つけることに対しては簡潔に“ダメ”だということを伝えながらも、褒める時にはめいっぱい褒め、たくさん一緒に遊ぶようにした。また、保育者が気持ちを代弁していくことで、本児も声や身振りや表情で一生懸命に思いを伝える姿が増えてきた。「○○か△△どっちにする？」「この中でどれがいい？」など選択して自分で選べるようにすると指さしや声などで示し、思いを伝えようとするようになり、担任の呼びかけにも応えようとするようになってきた。本児の思いが担任に伝わるようになったことで機嫌よく過ごせる日が増え、本児からのアピールも増えてきている。

1

場面

なんでわかってくれへんの！！

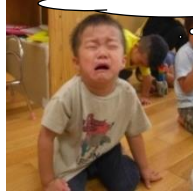
子どものつぶやき

子どもの思い

保育者の言葉

自分で
したいのに！こんなちがう！
でけへん！

ぼくの気持ち全然わかってくれへん！



本児の中ではイメージしているものがあつたり、友だちと同じものがよかつたり思いがあるのに、それを保育者がはじめは分かってあげられなかった。毎日本児と一緒に遊んでいる中で持ってきたものから何をつくりたいのか、どんなものが好きなのか分かってきて、本児の気持ちを満たせることが増えてきた。

2

場面

これにする！

いんげん
食べてみる…

カブトムシ！

何がみたいんやろ？
ダンゴムシ？バッタ？カブトムシ？

どれにする？

保育者の言葉がけはよく分かっているのに、指を使いながら選択肢をつくると、自分の欲しいものしたいことを選んで保育者に伝えるようになった。はじめは2つの選択肢だったが、選択肢を増やしても選べるようになった。

保育者との信頼関係もできてきて、自分の思いを“分かってくれる”“欲求を満たしてくれる”という体験を重ねたことで、好きなものだけではなく苦手なものも1つ選んでチャレンジする姿が見られるようになってきた。

3

場面

ねえねえ、先生！！

いくで！

あー!!
(流れた！)どこ？
どこ？

あ、はずれた!!

んっ!!
(先生！してよ)

流れるかな？



おお！やったー！



んっ!!(水！ここに流して)



はずれたなあ、つける？

ある日の水遊びでの場面で、樋から玩具の金魚が流れていくことに興味をもった。保育者にもこのおもしろさを分かってもらおうと声と身振りや表情でアピールする。水の流れが止まると、ホースを持っている保育者に“ここに水を流してほしい”と樋を触って伝える。また、遊んでいるうちに樋が外れてしまうと、自分で戻そうとするがうまくできず、保育者を見て外れてしまったことを知らせ、“つけてほしい”と自分の思いを伝えようとしていた。このように保育者が本児の思いを汲み取れることが増えたことが、本児も自分の伝えたいことを声や身振り、表情で一生懸命に伝えようとする姿につながってきている。

この事例のきらりんポイント（☆思いやりのある見取りや保育者の言葉かけ・かかわり ★輝いてきた子どもの姿）

- ☆本児の伝わらないもどかしい気持ちをまずは受けとめ、気持ちに寄り添った言葉がけをするようにした。
- ☆本児の姿を傍で見守り、伝えたいことを理解することで分かってもらえる喜びを味わえるようにした。
- ☆本児の欲求に応え、満たすことで安心して信頼できる存在になれるようにした。
- ☆本児の思いを言葉にして代弁し、気持ちを共有するようした。
- ☆本児の思いを友だちに伝えたり、友だちの思いを本児に伝えたりすることで保育者が仲立ちとなりながら、友だちとのつながりをもてるようにした。
- ★叫んだり、泣いたり、物を投げたりすることが少しずつ減り「ん！」「あ！あ！」などの声や身振り、表情などで一生懸命自分の思いを伝えようとする姿が出てきた。
- ★好きなものだけではなく、苦手なものにも挑戦する姿が出てきた。友だちが褒められていると、自分もできる姿を見せ、アピールすることが出てきた。
- ★保育者の言葉がけにより、待ったり我慢したり、おもちゃを友だちに返したりすることもできた。

◇事例研究会での学び

子どもたちが輝くには何が
大切なんだろう・・・？

- ・泣いたり、怒ったり、攻撃的になったり…どんな姿でも
まずはありのままを受けとめる
- ・気持ちに寄り添い共感する
- ・この姿になるのはなぜ？
機嫌がいいのはどんな時？
何が好きかな？
- ・選択肢を使って自己決定できるようにする
- ・気持ちを受けとめながらも、保育者の思いも伝える
そして…『子どものことを信じて待つ！！』

観察して一緒に
遊んで見取る

嬉しい

信頼

安心

伝わる
気持ち

先生好き

その為には『担任間の連携』が必須！

これがないとじつくりと子どもに向き合うことができなかった。

◇きらりんワード

ありのままを
受けとめる

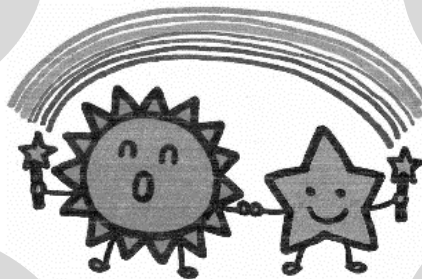
喜怒哀楽どんな姿も
“どんとこい！精神”で
ありのままを受けとめる

担任間の連携

保育は一人で悩まず
報・連・相
保育者間での様々な
見取りを共有する

信じて待つ

子どもの気持ちを
受けとめ、保育者の
思いも伝え子どもの
発信を待つ



保育者はモデル

保育者の言葉がけを
子どもはよくきいて
いる。友だちとのか
かわりにつながる

まずは一緒に！

保育者と一緒に
やってみることで、
次は自分で“やって
みよう”と思う

◇子どもたちの変容

不安な気持ち



先生のこと大好き！



安心できる保育者が
傍にいてことで自信
が出てきた！
やってみたい！

育てたい子ども像へ



友だちのことが気になるなあ
一緒に遊んだら楽しい！



◇保育者の変容と同僚性

研究をきっかけに学年間での話し合いの場が増えた。定期的に話し合うことで自分たちの思いを再確認したり、同じ方向を向いて保育ができるようになったりした。一人で保育しなければいけないと思わず、互いの知識を伝え合ったりフォローし合ったりして、それぞれの保育を見たり認めたりする機会ができた。保育以外のことも話すことで、関係を深め、相談しやすい楽しい雰囲気の中で保育ができるような環境に変化していった。

一人ひとりに目を向け、見取りながら“子どもたちが楽しめているか”“何に興味を向けているのか”を考えて子どもの理解へとつなげていくことを意識できるようになった。

◇この研究を通して分かったこと・これからも大切にしたいこと

- ・『育てたい子ども像』をイメージするだけではなく、具体的に言葉にして話をしたり、書き出したりすることでより明確になった。
- ・この研究を通し、輝いてきた子どもの姿を実際に見たことで、自己主張が強くなる2歳児クラスでは子どもたちの表現の仕方は様々だが、どのような表現でも思いを出せたことを認め、受けとめ、寄り添うことで、子どもたちが安心して保育者を信頼することが大切だと分かった。
- ・『育てたい子ども像』を意識して毎月のカリキュラムを立てたり日頃の保育を考えたりすることが、子ども一人ひとりと向き合うことにつながり、保育者として大切にしなければいけないことだと改めて感じた。

4. 3 歳児



育てたい子ども像

- 自分の気持ちを言葉だけでなく、身振り手振りなどの色々な形で表現しようとする子ども
- 友だちの気持ちに気づき知ろうとする子ども

◇年度当初の子どもの姿への思いやりのある見取り

年度当初、新入児は、泣いて登園する子どもや園で過ごすことを嫌がる子どもがいて、保護者と離れることを不安に感じている様子だった。進級児は、進級を喜ぶ気持ちと生活リズムや環境の変化に戸惑いや不安を感じている様子だった。また、友だちとのかかわり方が分からず、物や場所の取り合いが原因のトラブルも多かった。その時に『大声で泣く』『物や人に当たる』『言葉で伝えようとする』など自分の気持ちを出表できる子どもがいる一方で、『表情が乏しい』『言葉で表現することが難しい』など気持ちを出しにくい子どももいた。

家庭環境、友だち関係、体調や気分など多様な視点をもって子どもの背景に目を向け、どんな伝え方でも「嫌やったんやなあ」「お家の人がいいよね」などと子どもの立場に立ち、その子どもなりの精一杯の表現方法として見取ってきた。

◇育てたい子ども像への思い

少しずつ自分の気持ちを伝えることができるようになってきたが、困ったことや嫌なことがあった時に「〇〇ができない」「こうしたい!」と伝えることが得意な子どももいれば、黙り込んだままだったり、泣くことで知らせようとしたりする子どももいた。一人ひとりの姿を受容し“ありのままでいいんだよ”ということを伝えたい思いがあった。そのため、自分の気持ちを言葉だけでなく身振りや指さしなど子どもなりの方法で表現できるように、どんな姿でも受けとめることを大切にし、一人ひとりに合った援助をしている。

一人の世界から友だちの存在に気づき、次第にかかわりが広がっていく 3 歳児。日々のかかわりやトラブルの中で、子ども同士が“〇〇してくる子”という印象で見合うのではなく、保育者の仲立ちによってまずは相手には相手の思いがあるということを知り、相手の思いを知る経験を重ねていくことで、友だちの気持ちに気づき知ろうとする子どもになって欲しい。また、嬉しい・悲しい・怒っているなど自分の気持ちを受けとめてもらう経験を重ね“泣いてるのかな?”“どうしたのかな?”と周りにいる友だちのことも少しずつ知ろうとする力もついていって欲しいと願っている。

そのためにも、保育者が子どものどのような表現もしっかりと受けとめながら、子ども自身が自分の気持ちに気づくことができるよう思いの意味づけをするとともに、子ども同士があたたかくかかわり合えるように保育者がモデルとなることを心がけている。

◇育んできた取り組み

○まずは受けとめる

年度当初、新しい環境への不安や初めての集団生活への戸惑いから、大きな声で泣いたり、集団から離れたりするなどの行動で思いを表現する子どもが多かった。そんな子どもたちに対して、まずは保育者が子どものありのままの姿を受けとめることを心がけ“あなたの思いを分かろうとしているよ。先生はあなたの味方だよ”と、思いを丁寧に汲み取り寄り添ってきた。そのような経験を重ね“自分のことを丸ごと受けとめてもらえた”と感じて、安心でき受けとめてくれる人(保育者)との心のつながりも感じられるようになってきた。受けとめてもらう経験を積み重ねることで自分の思いを保育者や友だちに伝える姿が多く見られるようになってきている。



カブラを高く積み上げたいが途中で倒れてしまう。思い通りに完成させることができないまま片づけの時間になり泣き出すA児。まずは“片づけたくない”“最後まで完成させたい”という気持ちを受けとめる。

このまま置いといて後で続きする？

どこまで高くしたかったの？

後で一緒に続きしよう！

○思いを受けとめたうえで…

友だちを叩く、物を壊すなど、よくないと思われる行動も時にはあったが、まずは何故子どもたちがそういう行動をしたのか、その背景に目を向けるようになってきた。その後、思いを十分に受けとめたうえで、今の行動は「よくないよ」と伝え、代わりとなる行動を示したり、一緒に考えたりして、子ども自身で気持ちに折り合いをつける力が育つように援助してきた。自分の思いを全て言葉で表現することは難しい子どもたちでも、保育者に思いを代弁されると、気持ちが和らいでいく姿が見られた。



完成させたいけど、給食の時間になってしまったね

気持ちを受けとめたうえで“次の活動があるので、片づけをしてほしい”という保育者の思いも伝え、複数の選択肢を提案しながらA児が納得できる方法を探した。

ここまで高くできた！



その日の午後、好きな遊びの時間になると一目散にカブラを始め、高く積み上げることができ、保育者や友だちに見てもらうことで満足そうに微笑むA児だった。

○子どもに代わって思いを伝える

子ども同士でのかかわりも増えてくる3歳児。物の取り合いや思いの行き違いなどでトラブルになることも多く、年度当初は、自分の思いを表現することで精一杯という様子だった。保育者が間に入り、双方の気持ちをその子どもにとって分かりやすい言葉にして伝えることを繰り返して行ってきた。かかわりの中で、トラブルや思いの違いなどを経験していくことで、相手の思いに目を向けようとする子どもが増えてきている。

○3クラスで1チーム ～同じ思いをもってチームで保育しよう～

複数の保育者で子どもの姿を見取することで、多様な視点から実態を把握できると考え“3クラス全ての子どもを見守る”という心もちで子どもとかかわってきた。切り替えが難しく活動への気持ちが向かない子どもがいる時には、担任に代わって声をかけて、保育者全員で見守るようにしてきた。夏休み期間には普段の3クラスを2グループに分け、クラスを超えて過ごすことで、以前までかかわりが少なかった友だちや保育者と遊んだり話をしたりする姿が少しずつ増えていった。合同保育を通して、遊びの中でも刺激を受け、隣の保育室にもたくさんの友だちがいることや、気の合う友だちとの出会いにつながったように思う。

また、学年で活動する機会も積極的に取り入れていくことで、みんなで一緒に遊ぶことを喜ぶ声もきかれるようになった。園庭からの入室時、靴箱で立ち止まっている他クラスの友だちに「一緒に帰ろ」と誘って部屋まで連れて行ってあげたり、泣いている友だちがいると「どうしたん？」と傍へ寄っていく場面が見られたりして、クラスを超えた友だちとのかかわりが広がってきている。

保育者においても、年度当初は互いにクラスの様子を伺いながら保育を進めていたが、日々子どもの様子を共有することや学年で遊ぶ機会を通して、他クラスの子どもの姿を把握することにもつながってきた。担任同士で話す機会が増えたことで、クラスの隔たりなく子どもを見取り、どのクラスの子ともであたたかく受け入れたてきた。また、他クラスにおおらかに受け入れてもらえることで『安心して任し、任せられる関係』となり、子どもがより豊かに遊べる環境へと広がっている。

実践① お神輿づくり

4・5歳児と交流して遊んだ夏祭りから刺激を受けて、3歳児のクラスでもお神輿づくりがスタート！

完成したお神輿が廊下を回っていると、隣のクラスの子どもが部屋から覗いたり、一緒に後ろをついて回ったりしていた。その後、お神輿のある部屋から盆踊りの音楽がきこえてくると、自然にその部屋に集まりみんなで輪になって踊りを楽しんだ。



実践② 追いかけて玉入れ

学年で追いかけて玉入れをした時に、担任に見守られながら、担任以外の保育者の所に玉を入れに行ったり、友だちと一緒にカゴをねらって投げたり、たくさんの保育者や友だちとのかかわりを存分に楽しむ姿が見られた。



実践内容

大きく感情表現をする子どもが多いクラス。表現方法は様々で、言葉以外の方法で表現する子どもも多い。保育者が思いを汲み取ってかかわることが多かったが、友だちとのかかわりが増えてきた6月頃から、周りの子どもたちにも困っている子の様子を伝えるようにした。すると、子ども同士で困っている友だちを気にかけることや、困っている子どもの周りに複数名集まって助けようとするが増えてきている。

この事例のA児とB児は、気が合い一緒に過ごすことが多い。一緒に遊ぶだけでなく、互いに相手が困っている時に助けようとする姿も見られるようになってきている。

1

場面

ぼくのん、あげる！

(6月 22 日)

子どものつぶやき

保育者の言葉

小麦粉粘土でアイスをつくりたいが、粘土が足りず「粘土が無い！」と泣きそうになりながら大きな声で保育者に訴えるA児。保育者と一緒に「どうしようか…」と悩んでいると、B児が「ぼくのん、あげる！」と自分がつくっていた物をちぎってA児にあげた。(写真①)すると、周りの他児も次々に集まり、自分の物をちぎってA児にあげ始めた。(写真②)

(写真①)

ぼくのん、あげる！

B児

ありがとう

A児

Bくん、ちぎってくれたんだね。優しいね

(写真②)

ありがとう

A児

みんなくれて嬉しいね
美味しいアイスができ
そうだね

わたしもあげる

もらった小麦粉粘土で3段アイスをつくることができたA児。「みんなにもらって大きいアイスできたね。」と保育者が声をかけると「Bくんと、〇〇ちゃんと、△△くんと□□くんがくれてん！」と、くれた友だちの名前を全員覚えていて嬉しそうに保育者に話していた。

2

場面

カレーが食べられますように

(7月 12 日)

昼食がハヤシライスの日、前日の夕食がカレーを食べたB児が「また同じご飯やん」と落ち込み、机の下にもぐって出て来なくなった。保育者が気持ちを受けとめつつハヤシライスとカレーライスは少し違うことを伝えるなどするが、頑なに机の下から出て来ない。

それを見たA児が「お手紙書いてあげる」と、紙とペンを持ってくる。A児が何か書き始めたのを見てB児が机の下から出てきた。A児は無言で字のようなものを書いている。B児もその様子をじっと見ている。(写真③)保育者が「何て書いているの？」と尋ねると「B君がカレーを食べられますように」って書いてん」と応えるA児。その様子をみたC児が、紙と茶色の色鉛筆をもって何かを書き始めた。(写真④)「できた」と言うC児に何を画いたのか尋ねると「カレー」と答えた。「何でカレーを描いたの？」ときくと「B君にあげる」と言う。「頑張ってカレーを食べられるように？」ときくと頷くC児。

B児にそれを伝え、2人からもらった手紙を、昼食を食べる席に持って行った。テーブルに置いた手紙を見ながらハヤシライスを完食した。(写真⑤)保育者が「食べられたね」と声をかけると「手紙見たから食べられた」と嬉しそうに、大切に2枚の手紙を自分のカバンに入れていた。

(写真③)

B児

A児

カレーを
食べられますように※クラス内では、ハヤシライスを
カレーと呼ぶ子どもが多い

(写真④)

C児

カレーかいた

(写真⑤)

お手紙見ながら
やったら食べられそう

B児

もらった手紙

この事例のきらりんポイント (☆思いやりのある見取りや保育者の言葉かけ・かかわり ☆輝いてきた子どもの姿)

☆「〇〇くん、困っているんだけどどうしたらいい？」と問いかけ、友だちを思いやるきっかけをつくってきた。また、子ども同士の思いやりのあるかかわりに対して「困っているところを見つけてこうやって助けてくれたんだね」と、具体的な言葉で認めてきた。

☆小麦粉粘土が足りない時に、すぐにA児の分をつくるという方法もあったが、今の子どもたちなら誰か気づいて助けてくれるのではないかと、期待して待った。

☆C児は言葉で表現することは少ないが、思いはしっかりと持っている。C児の行動が、B児にも伝わるように保育者が橋渡しをした。

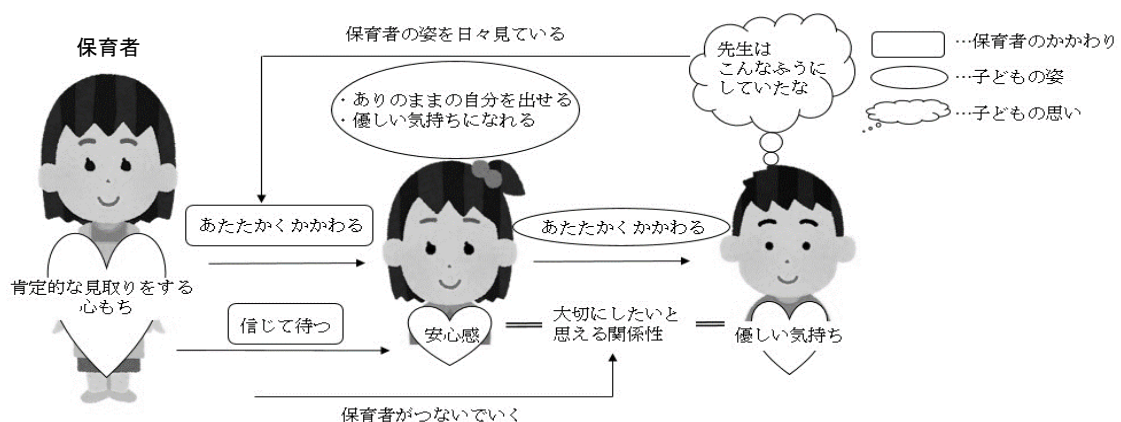
☆A児は、小麦粉粘土をもらったことが心の中に残っていた為、B児が困っている時に助けたいという気持ちが芽生えたのではないかと。

★友だちの姿を見て「僕も、私も助けてあげたい」と、思いやりのある行動が広がっていった。

★これまでは保育者のかかわりで、気持ちに折り合いをつける子どもが多かったが、子どもたち同士の声かけで、気持ちを立て直すことができる姿が多く見られるようになった。

◇事例研究会での学び

討議を通して『保育者が子どもを信じて待つ』ことが大切だと分かった。信じて待つためには、子どもたちを肯定的に見取る保育者の心もちが必要で、そういった保育者の日々のかかわりが積み重なって、子どもたちが安心して思いを出したり、優しい気持ちをもったりすることにつながる。複数の保育者で多面的な視点をもって討議をする中で、事例に登場する子どもたちの関係が、乳児の頃から続いていることも分かり、子ども同士の関係も、乳児期からの積み重ねのうえに成り立っていると気づくことができた。子どもたちは、気の合う友だちや一緒にいたいと思う友だちに対して“大好きな友だちを助けたい”と思いやりのある行動をとる傾向がある。保育者が日々あたたかく子どもたちとかかわりながら子ども同士をつなげ、クラスを一人ひとりの安心できる居場所にしていきたいと思った。



◇きらりんワード

受けとめる

よいところも気になるところも
全てをありのままに受けとめる
保育者の思いは、その後に伝える

自分の気持ちに

気づけるようなかかわり
子どもたちの思いやりのある
行動に対して自分自身の
気持ちに気づけるようにし
たり“それが優しさだよ”
と知らせたりしていく

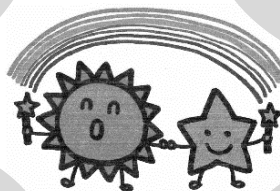
あなたのことが大切だよ
いるだけで大切な存在だと
いうことを、一人ひとりに
合った方法で伝える

モデルになる

子どもが真似をしても
“あったかいな”と思え
るような姿でいる

信じて待つ

“きっと大丈夫”と
いう目線で子どもを
信じて待つ



◇子どもたちの変容

自分の姿をありのままに出す



友だちの様子に気づく



何とかしてあげようとする



育てたい子ども像へ



◇保育者の変容と同僚性

- ・ねらいを考える時に“色々”“様々”など、曖昧な表現をしてしまいがちだったが、研究の中で、具体的に表現することの大切さを知り、ねらいを深く考えることにつながった。
- ・複数の保育者で子どもの姿を見ることで、多面的な視点から実態を把握できると考え、クラスを越えたかかわりをもつようにし、相談し合ってきた。子ども一人ひとりの実態を把握したことで、連携を密に取りながら、より安心してフォローし合えるようになった。
- ・保育者が同じ思いをもってチームで保育をしてきた。子どもとのかかわりで悩んだ時には、子どもの姿とその時の保育者の思いも含めて相談する中で、自分のことのように共感してもらい一緒に考え合ってきた。思いを出し合うことで、保育者の考え方の引き出しが増え、次の保育に活かすことができた。

◇この研究を通して分かったこと・これからも大切にしたいこと

- ・保育者の想定するおもしろさに捉われ過ぎず“子どもと一緒に遊びをつくっていく”ということが大切だと分かった。
- ・まずは受けとめ、そのうえで保育者の思いを伝える。さらに保育者がいくつもの選択肢をもって子どもの気持ちを丁寧に代弁することで、子どもが安心して思いを出し、友だちの気持ちにも気づき目を向けることにつながっていくということが分かった。
- ・日々迷い悩みながらも『育てたい子ども像』を念頭におき大切にしたいことを積み重ねていくことで、子どもの姿が変わっていくことを実感した。見通しをもちつつも焦らず、その時期の子どもたち一人ひとりに合わせたかかわりをしていきたい。
- ・保育者がチームという意識をもって、常に子どもの姿を共有し、実態に合った保育を話し合い実践し、多様な視点をもって振り返ることで、次の保育につなげることをこれからも大切にしていきたい。

5. 4 歳児



育てたい子ども像

- 周りの友だちや人に関心を寄せ、大切にしようとする子ども
- 保育者や友だちを信頼し、こども園が大好きになる子ども
- 安心して自分を出しながら、自分の思いを素直に表現しようとする子ども
- 自分でできることをしようとする子ども

◇年度当初の子どもの姿への思いやりのある見取り

進級に伴い不安で泣いたり保育室に入りにくそうにしたりする姿がある反面、新しい保育室や自身の成長に喜びを感じる姿も見られた。好きな遊びを見つけたり自分の思いを表現したりすることが難しい姿から新しい環境への不安が感じられたので、まずは保育者がゆったりとかかわり自分の思いを表現しやすいように、子どもたちの楽しんでいたことや新たな発見などをピックアップして一人ひとりが輝く場面を大切に保育を進めてきた。すると、保育者と一緒にかかわりながらではあるが、少しずつ自分の思いを表現する場面が増えてきた。

友だちとのかかわりや一緒に遊ぶ姿が増えてくると「〇〇ちゃんが△△してない」という言葉やかかわりの中で強い口調や手が出てしまうようなトラブルも出てきた。視野が広がり友だちにも目が向けられるようになってきたからこそその姿だと見取り、友だちとのかかわりを楽しんだりトラブルや葛藤の中で互いに刺激し合ったりしている姿を大切にできるように、互いの思いや気持ちの表現方法を知るきっかけになるようにしてきた。

◇育てたい子ども像への思い

友だちと一緒に過ごす楽しさを感じている子どもたちもいる中で、トラブルは相手の思いや自分の思い、葛藤と向き合うという心の栄養として大切にしている。振り返りや個々で話をする時には、互いの気持ちを知りどう感じたのか、また、周りの子どもたちもどう思うのかをみんなで考えられるようにしてきた。日々繰り返し話し合いをしていく中で、相手の思いを知ること、優しいかかわりについて知ったり考えたりすることを大切にしたいと思っている。

『友だちを大切に思い、自分にできることをしようとする』その心の育ちに向かっていくためには、安心して自分を表現できる環境や人的環境が大切である。保育者や友だちとの信頼関係があり安心して自分を出し、受けとめられることで周囲のことも考えられるようになる。また、相手を大切に思うためにはまずは自分自身が大切にされている実感をもつことが前提となる。研究テーマにある『かけがえのない一人ひとりを大切にあったかさで心つながる』ような子どもたちとの関係・クラス・学年・こども園であるよう日々子どもたちと向き合っている。

◇育んできた取り組み

【 Before 】



友だちのことを気かけ、優しい姿もある反面、相手の気持ちが分からずに手を出してしまったり友だちを傷つけてしまったりする子どももいる。自分本位や思い込み、勘違いなどでのトラブルも見られた。

ある日、手を出してしまい相手を傷つけてしまうということがあった。急遽、子どもたちと一緒に話し合い、どうしたらよいかを考える機会をもった。保育者が「嫌な気持ちになる時ってあるよね。そんな時はどうしたらいいと思う？何かいい方法はないかな？」と問いかけ話し合ううちに両手をクロスにする『我慢のポーズ』が生まれた。そのポーズは家でも兄弟喧嘩が始まると『我慢のポーズ』と言いながら気持ちに折り合いをつけているようだ。みんなで考えた『我慢のポーズ』が学年の合言葉になり、自分の気持ちを整理できるようになってきている。

小動物を通して自分と虫を重ね合わせながら「今どんな気持ちなんだろう？」と問いかけ、子どもたちと日々考えながら取り組んできた。「痛そう」「悲しそう」「嬉しそう」「喜んでいる」と子どもたちなりに観察し虫の思いに寄り添えるよう援助してきた。小動物は話ができないからこそ寄り添い大切にかかわることを伝え、思いやりを育めるような取り組みをしてきた。この取り組みを通して人に対しても同じことが言えることを日々伝えてきた。



友だちとのかかわりが楽しくなるにつれて、つमりの違いが生まれトラブルも増えてきた。時にはきつい言葉になり手が出てしまうこともあった。自分本位な心の動きや葛藤も丸ごと受けとめながら一つひとつのトラブルを学びの機会とし、その都度互いの思いを整理しながら『相手の思いを知る』ということを大切にしてきた。振り返りの中でも自分や相手の思い、周りの子どもたちはどう思ったかという視点も含めてそれぞれの思いや優しいかかわりについてどのようにしていけばいいのか話し合ってきた。

【 After 輝いてきた子どもの姿 】



友だちを大切にしようとする子ども

トラブルになった際にはチャンスと捉え、保育者が仲立ちをし、互いに思いを出しながらそれぞれの気持ちを伝えてきた。また、『我慢のポーズ』で互いを傷つけない行動をとろうとしたり、思い通りにならないことを何度も繰り返し経験したりしたことで、人には嬉しい気持ちや悲しい気持ちなどたくさんの気持ちがあるということを知った。友だちとのかかわりを通して相手の思いや考えに気づき、寄り添う姿も多く見られるようになってきている。また、少しずつ相手の思いを大切にする態度が身についてきた。

毎日の観察が日課となり、虫の小さな変化に気づくことが増え「カマキリ大きくなって」「餌がなくてお腹がすいてるかも!」「〇〇くん、その持ち方したら痛がるよ!」「虫が逃げちゃった!みんな歩かないで!」など生き物に対しての愛情が芽生え、思いに寄り添う姿が多く見られるようになってきた。園庭に出るたびに餌を取りに行ったり友だちに虫の扱い方を教えてあげたりして自分たちができることをしようとする中で、生き物を通して命の大切さだけではなく子ども同士のつながりや思いやりの気持ちも育ってきたように感じる。



人や小動物に関心を寄せ自分にできることをしようとする子ども



安心して自分を出しながら自分の思いを素直に表現しようとする子ども

日々トラブルや葛藤を経験しながら学びを積み重ねてきた子どもたちは、少しずつ相手の思いを考えようとする姿が見られるようになってきた。話し合いの中で「そんなんされたら悲しい気持ちやな」と相手の思いに共感する言葉が出たり「じゃあ〇〇してみたら?」「うん、それいいね!」と気持ち以外の面での解決方法が出たりする場面もあった。たくさんのトラブルを通して悲しい思いや葛藤、共感してもらった嬉しさなどを感じ、繰り返し相手の思いについて考えることを通して友だちを大切にしようとする心が育ってきている。これからも自分の思いをしっかりと出しながら、相手の思いや優しいかかわりについて考えることを大切にしていきたい。

実践内容

虫に興味をもち始めたことをきっかけに廃材や段ボールを使って生き物をつくって遊んだり飼育コーナーのレイアウトの工夫をしたりしてより興味をもてるように環境を整えてきた。子どもたちはツマグロヒョウモンや赤ちゃんのカマキリが変化していく様子を不思議そうに観察し、新たな気づきや変化に対して自分たちなりに考え生き物に対してより関心を示す姿が多く見られるようになってきた。また、生き物へのかかわり方や声かけにも少しずつ変化が見られるようになってきている。

1

場面

これは何やる？

〈ツマグロヒョウモン〉

子どものつぶやき

保育者の言葉

お尻フリフリしてる～

なんかキラキラの
点々がついてるわ！この後、どう
なるんやろうねあれ？血が
出てる！

死んじゃったん？

ちょっと調べてみようか！

〈赤ちゃんのカマキリ〉

この卵から
産まれてきたよ！えさを食べて
くれているかな？
喜んでくれているかな？カマキリの赤ちゃん
いっぱい！！赤ちゃん、ちゃんと
食べてくれている！ひもがいっぱい
ついてるな～

2

場面

リアルタイムの振り返りで生き物の変態場面を共有

幼虫の色が
変わってる！幼虫からサナギになるに
は時間をかけてゆっくり
変化するんやねそれいいね！
ばら組の家族みたい！名前つけてあげたいな
“こたろう”はどう？

この事例のきらりんポイント（☆思いやりのある見取りや保育者の言葉かけ・かかわり ★輝いてきた子どもの姿）

☆生き物は話ができないからこそ振り返りや話し合いをする際には、子どもたちに自分と虫を置き換えて話をし「自分たちだったらどんな気持ち？」と考えられるような時間をつくってきた。また、話し合いを重ねてきたことで虫に対する扱いや言葉かけにも変化が見られるようになってきている。

☆子どもたちのつぶやきを逃さずに一緒に考え、気づいたり共感したりしてより生き物に興味をもってもらえるように援助した。

☆生き物の DVD を見たり実際に幼虫からサナギになる瞬間を動画で撮影し見たりして「もっと見てみたい」「もっと知りたい」と思えるような環境を用意し、生き物の変化に合わせてレイアウトの工夫をしながら環境を変えてきた。

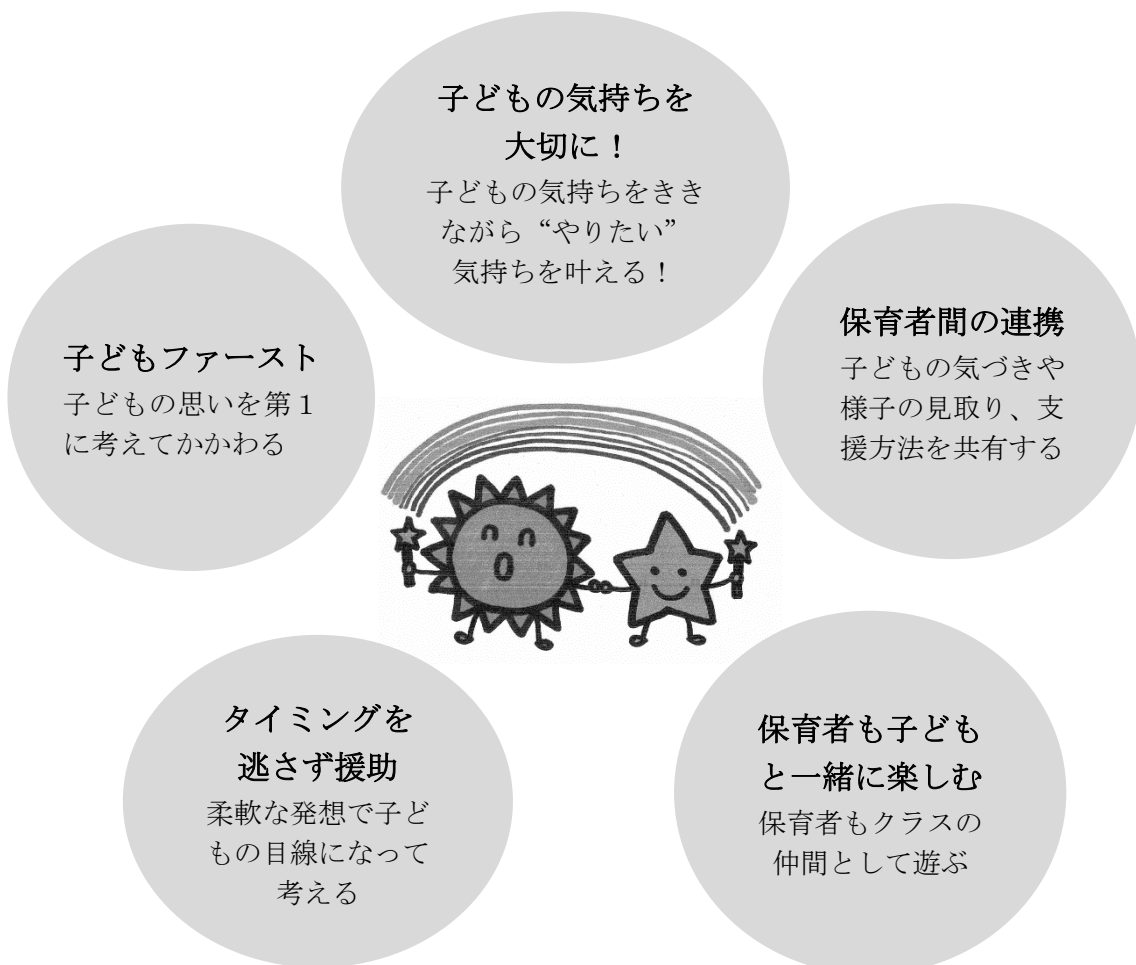
★生き物が成長するとともに形や色が変わっていくおもしろさや不思議さを感じたことで「もっと見てみたい！」「次はどうなるの？」と目をキラキラさせながら観察する姿が見られた。

★自分と生き物を重ね合わせながら「今は〇〇してるのかな～？」「これはお母さんでこっちが子どもかな？」「えさがないからお腹すいてるかも知らへん！」「えさ取ってこなあかん！」などと生き物のことを気にかけて意識する姿が見られるようになってきた。

◇事例研究会での学び

- ・子どもと保育者の『ズレ』が生じることがあるが、それは『子どもの実態そのもの』であり、保育者の実践における『ヒント』となる。
- ・子どもたちのつぶやきを逃さずに保育者も一緒に考え、気づいたり共感したりしてより生き物に興味をもってもらえるように援助することの大切さを改めて感じた。
- ・事例や記録をとることで保育実践を振り返り、考察することで質の向上につながった。
- ・正解を求めず、色々な視点や多面的な見方をもつことが大切である。
- ・『常に子どもファースト』でかかわり一緒に考えていながら、子どもの“やりたい”気持ちを叶えられるようにする。
- ・アンテナをはりめぐらせることで、子どもの変化にすぐ対応しようとする姿勢が大事である。
- ・柔軟な発想で子どもが楽しめる方法を探る保育者の存在が、人的な環境としてとても大切である。
- ・保育者たちも子どもたちと同じようにクラスの一員となって一緒に楽しみながら、保育者間でも気づきを共有してきたことでさらに連携も密になった。

◇きらりんワード



◇子どもたちの変容

友だち大好き！！
でも時には嫌になることもあるよ



友だちの思いに気づけたよ。一緒に
考えると楽しいな！



「わぁーどうしたんだろう！悲しいのかな？」
相手の気持ちにも寄り添えるようになったよ

◇保育者の変容と同僚性

研究の中でこれまで以上に保育について話し合う機会が増えたことで自分の保育を見つめ直すことも増えた。また“認め合う”“否定しない”ことを学年間や園全体で大切にしてきたことで、何でも相談できる関係ができ、互いの保育を高め合うきっかけが生まれていった。子どもも大人も安心できる環境があることによって保育の質が向上したように感じる。

◇この研究を通して分かったこと・これからも大切にしたいこと

- ・トラブルは子どもたちにとって相手の心を考える大切な学びの場となり、トラブルを経験することで“思いやり”の姿へとつながっていく。保育者は目の前にいる子どもたちに身につけて欲しい“育てたい力”を明確にした保育を重ね、援助することの大切さを学んだ。
- ・小動物とのかかわりを通して、言葉のコミュニケーションがとれないからこそ自分と生き物を重ね合わせ寄り添い、生き物を大事にしようとする姿は人に対しても同じことが言えるということが実感として分かった。また、『思いやり』は教えられて身につくものではなく、遊びや生活の中で優しくしたりされたり、思いやりのある姿を見たりしながら実体験を通して育まれていくものだと感じた。
- ・遊びが充実し、子どもの心が満たされた時や保育者や友だちに受け入れられ認められた時に子どもたちの自己肯定感が高まり、相手の思いも受け入れられるようになることが分かった。
- ・子ども第1に考え保育を進めてきたが、まだ保育者の思いだけで子どもの姿を捉えたり、援助したりすることもある。これからも保育を振り返り見つめ直しながら『思いやり』を大切にし、さらに改善し充実させていきたい。

6. 5 歳児



育てたい子ども像

- 互いの思いを気づき合って、育ち合える集団
- 友だちの素敵なおところを見つけられ、自分自身も素敵と思える子ども
- 友だちの頑張ったり困っている気持ちに共感できる子ども

◇年度当初の子どもの姿への思いやりのある見取り

新しい環境や担任になり不安感や緊張感をもっている子どももいたが、クラス間のパーテーションを大きく開けたことで「となりのクラスに行ってきます」と、他のクラスの友だちや保育者と一緒に過ごす姿があり、大きく戸惑う様子は見られなかった。

したい遊び、やってみたい遊びがたくさんあり、アイデアを活かし主体的に遊びを考えることを楽しんでいた。また、一方で一つひとつの身の回りのことをやり遂げるまでに時間がかかり、見通しをもって行動に移しにくく個別にじっくりとしたかかわりが必要な子どももいた。友だち関係では、自分のことに精一杯で友だちのしていることや話していることには興味がもちにくい場面があった。そのような子どもたちの姿を“まだまだ甘えたい”“じっくり話をきいて欲しい”と感じていると捉えた。また、自分の気持ちをストレートに表現する新入園児に対し、どのようにかかわればいいのか戸惑う子どもたちもいた。新しい友だちと仲良くなりたい気持ちや困ったときに助けてあげたい気持ちを持ち、相手を知ろうと自分から話しかけたり遊びに誘ったりしようとする姿が見られるようになってきた。

◇育てたい子ども像への思い

これから世界が広がっていく子どもたちが、出会うたくさんの人たちと自分との違いを肯定的に受けとめ、ありのままの姿を受け入れられる人になって欲しいという願いをもち、幼児期において大切にしたいことは何かを考えた。

進級時の子どもの姿から、自分の思いをありのままに表現できることを大事にしながらも、友だちに興味をもち、親しみながらつながり合って欲しいと思っている。また、ありのままの姿を互いに受け入れることのできる集団は、子どもたちにとってあたたかく居心地のよいものだと感じている。友だちの思いや頑張っているところ、困っていることなど様々な友だちの姿に対して、言葉をかけられる力を育てていきたい。そして、そんな友だちの姿に優しくできる自分も、とても素敵だということに気づき、自信をもてるようになって欲しい。このように自他の“きらりんポイント”を見つけることができる優しさを持ち、一人ひとりが“きらりと輝くかけがえのない存在”であり、互いに育ち合える集団になって欲しいと思っている。

◇育んできた取り組み

○みんな友だちやねん！

進級した子どもたちの不安を少しでも取り除き、クラス集団としてのつながりだけではなく学年集団としてつながっていけるように保育者間で話し合った。クラス間のパーテーションを大きく開けて常に合同で保育を進めていくことで、子どもたちが友だちとのかかわり方を知り、つながりが深まるようにと願い、日々保育者間で情報共有しながら見守り保育してきた。

初めは互いのクラスに遊びに行っている感覚をもっていて「今何しているかな」と様子をうかがう姿が見られたが、クラスの垣根を越えて一緒に活動してきたことで、今では登園してくると自分のしたい遊びがあるクラスに行き来し遊んでいる。そして、一方の担任がクラスの子どもと振り返りをしていると、もう一方のクラスの友だちにもその話を知らせたり誘ったりする姿があり、子どもたちにとって学年で一緒に過ごすことが当たり前になってきた。また、行き来して遊ぶことで友だち関係にも広がりが見られるようになり「にじぐみもほしぐみもみんな友だちやねん」と保護者に嬉しそうに話す子どもの姿もあった。

両クラスの間のパーテーションを取り除きワンフロアとして活動する



○きらりんポイント

自分の気持ちをストレートに表現したり、きつい言い方で伝えたりすることで、思いがけず友だちを傷つけていることがあった。保育者も心がけている“肯定的に受けとめる”ということを子どもたちにも気づいて欲しいと思い、まずは“友だちの光るところ”を『きらりんポイント』として見つけられるようにした。振り返りでは保育者自身が子どもの『きらりんポイント』を見逃さないようにし、子ども同士の気づきを大切にした視点の発問ができるように心がけてきた。4月当初は「ホッピングを頑張りました」「今日こんな絵をかきました」と自分のことをきいてもらいたい姿があったが「○○ちゃんがホッピングで□回跳べるようになってた」「△△君が楽しそうに絵を描いていて嬉しかった」と友だちのきらりと光る様子を自分の喜びとして感じられるようになり、友だちの光る姿を積極的に見つけられるようになってきた。また、泣いている友だちの話をきき、自分たちで解決しようとした時には「○○ちゃんが泣いてたら、自分まで泣けてくるわ」と、目に涙をいっぱい溜めて友だちのことを自分ごととして捉えるようにもなっている。



実践 ～リレーの取り組みを通して～

1学期から、友だちの頑張りや『きらりんポイント』に気づき、認め合えるような集団づくりをめざしてきた。運動会では互いのクラスの友だちと競うだけでなく力を合わせて欲しいと願い、リレーは2クラス混合で3チームで行うことにした。初めは、混合チームということが新鮮で、一緒にチームになったことやただ走ることを楽しんでいて、繰り返し遊んでいくうちに“勝ちたい”という思いが強くなり、チーム内で意見が飛び交うようになった。

<A児を含むオレンジチームでの話し合い>

友だちとかかわって遊んだり、リレーのルールを理解して走ったりすることが難しいA児。リレーを始めた当初はA児がリレーに興味を示しにくかったこともあり、A児の代わりに別の友だちが走り、1位になることも多かった。「また1位!」「どうせ僕たちが1番や」といった声もきかれ始め、A児が自分たちのチームの一員であることを忘れてるように感じられた。そこで“A児も含めた全員でオレンジチーム”だという認識をもって欲しいと思い「いつも1位嬉しいね。でもAちゃんって走ったことある?」と投げかけた。「ほんまやな」「でも走ってくれるかな?」「分からん…」という子どもたちの反応であった。A児が参加しづらいかもしれないが、次回に向けてA児の走る順番をみんなで相談した。次に取り組んだ時はなんとか列に並ぶことができたが、A児の順番になり、バトンを渡そうとするとしゃがみ込み受け取ろうとしなかった。保育者の援助でやっと受け取り勢いよく走り出したが、トラックを走るということが分からずコースアウトしてしまった。次の子どもが急いでバトンを取りに行き、そこからバトンを繋いでいくが、結果は初めての最下位であった。「Aくんのせいで負けた」「走るの速い子だけでチームを決めなおしたい」と話す姿から話し合いが必要だと考え、チームで振り返りを行った。

保育者の援助①：子どもの思いに寄り添い、安心して本当の思いを伝え合うことができる場をつくる

園「今日のリレーはどうだった?」 ④「はじめて負けて悔しかった。」

園「そうやんな。いつも1番やったもんな。でもAくんはどうやったやろう?」

④「初めて走ってた!」「結構速かった!」「Aくん笑ってたな」と肯定的に話す子どもがいる反面“A児のせいで負けた”と浮かない表情をして黙る子どももいた。

園「どんな気持ちでもきくよ。何を話しても大丈夫!」と伝えることでその子どもたちも

④「勝たなかった!」「Aくんにはリレーって難しいんちゃうかな」と思っていることを友だちにも率直に伝え、チームでA児について考える機会となった。

保育者の援助②：子どもたちの思いを尊重し、信じて任せる

話し合いの場を重ねるごとに“自分たちは勝ちたい”が“A児にも走ってほしい”という思いがあることに変化していった。

「いつ走りたくなるか分からないから、A児の順番は決めやんところ」

「どこでも入りたいときに入れてあげよう」

「A児の周りを手をつないで、一緒に走るのはどう?」

「3人は危ないんじゃない?」「じゃあ1人!」「誰にする?」

「走るの速い子にしようや」「そうやな」

「いや。Aくんの走る速さに合わせてあげやなあかん」「ひっぱられたりしたら嫌になるかもしれへん」「じゃあBちゃんは?BちゃんいつもAくんのことよくみてるやん」

「ほんまや!AくんもBちゃんのところによく行ってるし、Bちゃんのこと好きかもしれへん」

「みんなAくんと友だちやけど、Bちゃんのことめっちゃ友だちと思ってそうや!」

「Aくんが無理そうやったらBちゃん行ってあげてな」「Aくん走るん嫌かもしれへんな」と自分たちでA児の思いを理解しようとし、解決策を導き出していった。

子どもたち自身で話し合ったり試したりしながら納得のいく方法を見つけ出したことで、“A児がチームの一員であること”や“走ることができなくてもB児がA児の分を担っている”ということをチーム全員で再認識し取り組む姿へと変わっていった。これまでの取り組みを通して、友だちのありのままの姿を受けとめ、大切にしようとする集団へと育ってきているように感じた。



実践内容

バランスや短縄、竹馬などの運動遊具に挑戦する“チャレンジタイム”をつくり、クラスみんなで取り組んでいる。初めてのことや苦手なことに前向きに取り組むことが難しいA児。自分でやってみようと思うタイミングを逃さず、A児の思いを受けとめ日々かかわっていく中で、友だち同士で声をかけ合ったり教え合ったりする姿が見られるようになってきた。“やってみたら楽しい”“できるってうれしいな”と思える成功体験を積み重ね、自らチャレンジしようとする姿が増えてきている。

1 場面

友だちとなら やってみようかな

子どものつぶやき

保育者の言葉

全員で短縄にチャレンジした日、A児は“お気に入りのオレンジ色なら…”と短縄を手に取るが、“自分には難しい”と分かったと泥水に縄を放り投げてしまった。そこで担任は、A児のやりたくない思いに共感し、無理強いするのではなく、その後の様子を見守っていた。同じように気分が乗らず泥水で一緒に遊んでいた女児が『バランス』にチャレンジし始めたのを見てA児も挑戦し始めた。一人ではなかなかうまく進めないA児を見て、友だちが両サイドから手をつないでくれるがA児の進む速さと歩調が合わず進みにくそうであった。(写真①)

保育者が「Aくんがどうすれば怖くないのかな」と問いかけることで、B児とC児が視線をA児の足元にうつしたり、歩幅を合わせたりする姿に変容し、A児も顔を上げ笑顔が見られるようになった。その後、A児を助けようとする数人の列ができた。(写真②)

(写真①)

B児

まだちょっと
こわい…

C児

Aくんがどうすれば
怖くないのかな？

A児

(写真②)

B児

もうちょっとで
ゴールやで！次、ほくも手つないで
あげるよ！Aくんのことを助けようと思って
みんなが集まってきたよ！

A児

2 場面

“オレンジ色やったらやってみようかな！”

1か月後のチャレンジタイム。友だちが短縄や竹馬などに挑戦し始める中、A児が周囲の様子を見渡しながら何にチャレンジするか悩んでいたのが「オレンジ色あったよ！」とA児が好きなオレンジ色の短縄を見せると「やってみようかな」と短縄を受け取り、チャレンジを始めた。15分間程、諦めずにチャレンジし、偶然にも1回跳べた！！それを見ていた周りの友だちと保育者が「やったあ」と自分のことのように喜んだ。

今日は
やってみようかなむずかしい
な～今1回跳べてたやん！
すごいね！！

3 場面

Aくん、かつこよかったで！（認め合う振り返り）

クラスの友だちにもA児の頑張りを伝えたり、できたことを一緒に喜び合ったりする集団づくりへとつなげたい思いから、チャレンジタイム終了後に振り返りを行った。

Aくんの頑張ってたところを
見ていた人いるかな？

は～い！！

何回も頑張ってる
ところがかつこ
よかったよ！

ありがとう

みんな、Aくんのことを応援してくれ
てるね。嬉しいね！

この事例のきらりんポイント（☆思いやりのある見取りや保育者の言葉かけ・かかわり ★輝いてきた子どもの姿）

☆“みんなと同じことに挑戦する”ことにこだわらず、A児自身が自分でしたいことを選択し、A児の葛藤や、やってみようとする気持ちを受けとめじっくりと向き合い、かかわってきた。A児の気持ちの変化に気づき、挑戦する姿を認め、できるようになる嬉しさや喜びに共感しながら取り組んでいる。

☆周りの子どもたちにも「初めてチャレンジする時の気持ちってどんな気持ちかな？」と友だちのことも自分ごととして考え、子どもたちが自身が教え合ったり励まし合ったりできるような振り返りの場をつくってきた。

☆できるようになったタイミングを逃さず声をかけ、A児が保育者や友だちから認められる嬉しさや心地よさを感じ、自分に自信もてるように援助している。

★A児は「縄跳びがちょっと難しい」と具体的にできないと感じることを伝えられるようになってきた。“難しいからやりたくない”ではなく、まずは保育者と離れた場所でやってみて、“できた”ことが自信となり友だちとも楽しめる時間が増えてきている。

★友だちから励ましや応援を素直に喜び、保育者や友だちから認められる嬉しさを感じながら根気強く取り組む姿も見られるようになってきた。

★以前の自分と同じように難しいことに挑戦することに悩んでいる友だちに「毎日頑張ればできるかもしれないよ」と励ます姿もみられるようになってきた。

◇事例研究会での学び

＜子どもが輝いてきた要因＞

- ・自分のタイミングでチャレンジできる安心な環境があり、あたたかく見守ってくれる信頼のできる保育者の存在があること。
- ・答えを出さずに子どもたちが“どうすればうまくいくか”考えられるような言葉かけをしてきたこと。
- ・一人ひとりに合わせた丁寧な保育者の見取りが大切であること。
- ・振り返りを通して友だちのどんな姿も肯定的に捉え、頑張りを認め合える仲間がいること。

＜討議を通して分かったこと＞

- ・肯定的に認め合うことが他者理解へとつながり、子ども同士・子どもと保育者・保育者同士ともに絆が確立されていく。 ⇒ あたたかい集団づくりにつながっている。
- ・保育者が子ども理解を深めることで、友だちの姿を肯定的に捉え、互いに尊重できる言葉かけをすることにつながっている。
- ・一人ひとりの子どもをよく理解するには、子どもが納得するまで待ち、じっくりかかわり寄り添うために、保育者同士が連携する。
- ・一人ひとりが安心して自己発揮し、互いの思いを気づき合って育ち合える集団をめざすために、保育者自身の人権感覚を磨く。

◇きらりんワード

どうしたらいい？

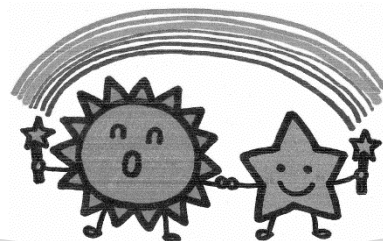
子どもの気持ちを大切に、
自分たちで考えられるような
言葉かけをする

子どもたちを 信じて任せる

子どもたちが助け合ったり
考え合ったりする姿を最後
まで見守る

絆

- ・子ども同士
- ・子どもと保育者
- ・保育者同士



きらりんポイント

子ども同士が互いの
素敵なところを
伝え合う

チーム力

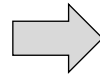
大切にしたい視点をもって
その日の保育を振り返り、
学年間で共有し、
次につなげていく

他者理解

友だちのどんな姿も
肯定的に捉え、自分
ごととして、考え
理解する

◇子どもたちの変容

どの保育者とも信頼関係を深め
認められる心地よさを味わう



笑い合える友だちができ
安心できる居場所がある



友だちの気持ちに寄り添う姿



育てたい子ども像へ



思いやりの気持ちを持ち
友だちとつながっていく姿



◇保育者の変容と同僚性

互いの思いを気づき合って、育ち合える集団になって欲しいと保育者間で話し合い、自分のクラスだけでなく2クラスを1つの集団として捉え、子どもたちの育ちを支え合っていたと考えてきた。それからは日々の保育の振り返りや教材研究・保育の評価・反省などについて日頃から対話し、それぞれの思いを共有することを大切にしてきた。そんな日々を積み重ねることで信頼関係や絆が深まり、常に連携し、互いのクラスを思いやることのできる保育者集団へと変容してきた。“保育者同士のあたたかい関係から子どもたちへ…” 大人も子どもも、みんなで過ごすことが心地よいと感じられる日々になっている。

◇この研究を通して分かったこと・これからも大切にしたいこと

園内研究会や事例研究会、学習会など様々な場面でたくさんの保育者と対話してきた。保育観や子どもの姿の見取り方など自分とは違った考え方があり、その都度自分自身を振り返り、よりよくするためにはどうすればいいのかを考える時間となった。また、保育者同士がそれぞれの考え方を否定するのではなく『肯定的に受けとめ、認め合える関係』であるからこそ安心して自分の思いを伝えることができていたと感じる。子どもたちも同じようにあたたかい環境の中でそれぞれが自己発揮し、友だちとつながり合える嬉しさや心地よさを感じられるようになってきた。これからも“かけがえのない一人ひとりのありのままの姿”を受けとめ、心を育んでいく役割を担っていきたい。

7. 一時預かり保育



保育者の心もちとかかわり

- 穏やかな言葉かけや笑顔で明るく接し、一人ひとりの気持ちを受けとめていく
- 保育者がモデルとなる。また気持ちを知ることができるように相手の思いを肯定的に伝え、仲立ちをしていく
- 保護者との信頼関係の構築のため、園での様子や成長を伝え、ともに喜び合っていく

◇子どもの姿への思いやりのある見取り

日々利用者が変わり個々に家庭環境が異なるので、一人ひとりが安心して過ごすことができるかかわりや援助、環境づくりを試行錯誤しながら保育している。

初めての環境で泣いたり保育者にしがみついたり、給食を嫌がるなど不安な気持ちを見せる子どもが多かった。そこで「お家の人と離れるの寂しいよね」「不安だよね」と子どもの気持ちに寄り添い、受けとめ、子どもたちが安心感をもって過ごし、帰る時には“楽しかった”と思ってもらえるようなかかわりができるように心がけてきた。

また、生活リズムや好きなもの、興味があるものも一人ひとり違うので、ぐずった時は「まだまだ遊びたいよね」「こっちの遊びの方が好き!？」と内面理解に努め、トイレに行くことをためらう子どもの姿からは、「水の音、こわいのかな」「興味のあるものや楽しい雰囲気になったら行けるかな?」と考えるようにしてきた。

このように、子どもたちがどんな心もちでいるのかを考え、保育者間で相談し合い、子どもたちのありのままの姿を受けとめてきた。



◇心がけてきた取り組み

一人ひとりが安心感をもって笑顔で過ごすことができるように、子どもの気持ちを汲み取り代弁や共感しながら、個々の生活リズムに合わせた保育を心がけてきた。

思いを表出しながら、存分に遊び、満足感を味わうことで子どもが自ら食事や睡眠に向かえるようにしている。また、子どもの楽しい気持ちを引き出せるようにそれぞれの好きな遊びや興味を捉え、十分に楽しめる環境をつくってきた。

トイレを生き物や乗り物などの子どもたちが好きなイラストで明るい雰囲気にしたこと、楽しみな気持ちをもって自分から進んで行くことができるようになってきている。また、タオル掛けの表示も分かりやすくし、自分で手を拭くことができるようになり自信につながっている。

友だちとのかかわり方にも戸惑いがあったので、相手の気持ちを知らせたり、かかわり方をモデルとなつて示したりしてきた。丁寧に仲立ちをする中で優しい気持ちを育てていけるように心がけた。また、保護者にも安心してもらえるようにお迎えの際に子どもの様子を詳しく伝えたり、作成したドキュメンテーションを掲示したりして情報発信し、ともに成長を喜び合うことも大切にしている。



◇きらりんワード

いろんなことを やってみよう！

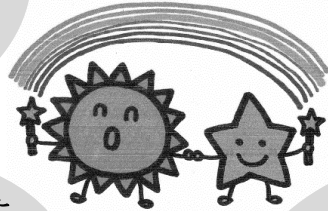
散歩・生き物とのふれあい・飼育を通して動植物に親しみをもつ

安心してね

ありのままの姿を受けとめた
かかわり

好きなものなあに

興味をキャッチし、成長に合わせた好きな遊びや環境を用意する



ゆっくりでいいよ

一人ひとりの生活リズムに合わせた保育

子どもの きらりんを発見！

子どもの成長を、保護者と分かち合う
ドキュメンテーションで発信

◇保育者の変容と同僚性

保育者間で子どもの発見や成長を丁寧に語り合い、伝え合うことで、より一人ひとりの子どものことを知ることができ、子ども理解が深まったように思う。

また、子どもたちへのかかわり方や特性を担任間だけでなく、フォローの保育者とも共有し、共通理解に努めている。さらに一時預かり保育を利用する保護者の方々にもそれぞれの家庭の事情があり利用目的は様々であることを鑑み、保護者の心のよりどころにもなるように努めることの大切さや子育て支援としての必要性に気づくことができた。



◇この研究を通して分かったこと・これからも大切にしたいこと

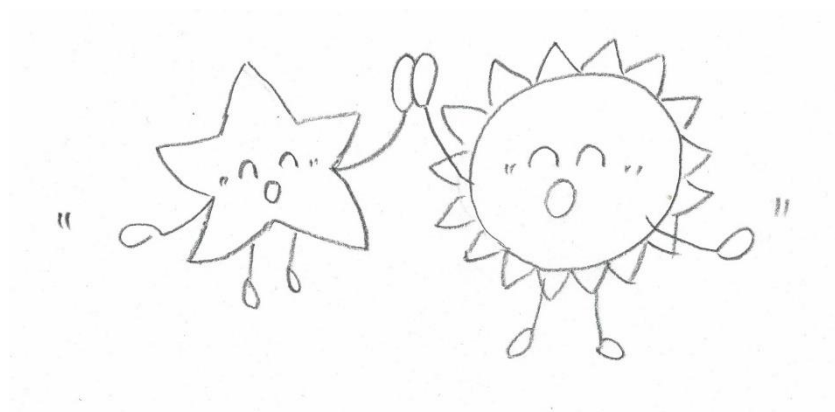
日々利用者が違う中で、まずは安心して過ごせるようにありのままの姿を受けとめ、色々な角度から子どもを見取り、一人ひとりに合った表情やスキンシップ、選択肢を与える、子どもが自分で考えられる言葉かけなどのかかわりを心がけてきた。試行錯誤を繰り返していく中で子どもたちが何を求めているのかが、日に日に見えてくるようになり、子どもたちの笑顔がより増えていったように感じている。また、子どもが何に興味をもっているのかを捉え、遊びや環境づくりをしていく中でやりたいことが実現できるようにその都度環境を見直し、再構成していくことの大切さを感じた。

また、やりたい気持ちを存分に出して遊ぶことで充実感を味わい、異年齢で交流をする中で“思いやり”の気持ちが育ち、それらが自己肯定感や社会性にもつながっていくのだということを実感した。

研究を通して学んだことを意識し大切にしながら、今後も保育を行っていきたい。



第3章 安中スタイルの研究



第3章 安中スタイルの研究

1. 保育者の意識の変容

(1) 『育てたい子ども像』から見た“思いやり”の道筋

研究1年目は研究テーマをもとに“こんな子どもに育て欲しい”という願いを職員間で話し合い、そのためには何が大切か、どう育てていきたいかをさらに深めていき『育てたい子ども像』を考えた。研究に対して手探り状態の中、試行錯誤しながらも1年目の研究を通して子どもの姿を肯定的に丁寧に見取り、具体的な援助や環境構成を実践することで、今までは何となく“こう育て欲しいな”と漠然と思っていた子ども像が具体的なものになり、職員の子どもに対する見取りや意識も大きく変容した。

研究を自分たちで進めていこうとする意識が強くなり、2年目の研究をどのように進めていくのか、どのような研究にしていきたいのか、積極的な話し合いをもつことが多くなった。クラス間・学年間で担任がそろって話し合えるよう体制を確保していく中で、どの職員も意見を伝えやすい雰囲気が出てきた。

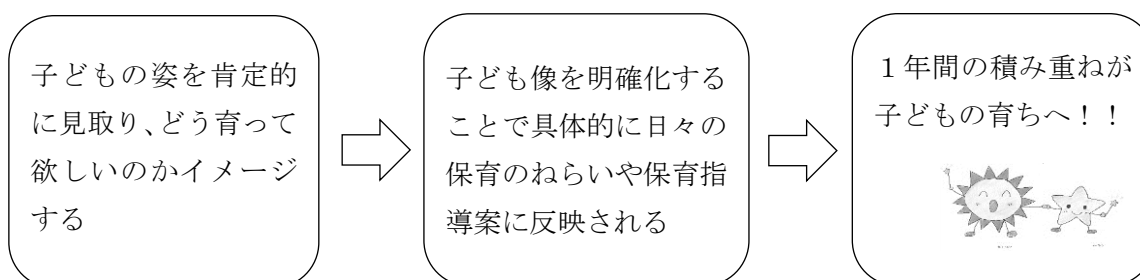
『育てたい子ども像』を考えるにあたって、保田先生より“あたたかいつながりをもてる子ども”を育てるために具体的な姿を捉え

- ① どう優しい子どもに育て欲しいのか
- ② どんなかかわりのできる子どもに育てたいのか
- ③ 3月にどんなクラスになって欲しいのか

の3点をふまえ具体的に「育て欲しい姿を考えるように」とご助言をいただいた。昨年度の『育てたい子ども像』を年齢順に並べてみると統一性がなかったが、今年度は発達の道筋が分かる『育てたい子ども像』へと変容した。



＜取り組んできた『育てたい子ども像』のイメージ＞



『育てたい子ども像』がより具体化し明確になったことや、保田先生に「抽象的ではなくもう一步踏み込んで具体的に落とし込んで、ちょっとだけおもしろくなるようにかかわるといい」とご助言いただいた。月案や保育指導案立案時に、『育てたい子ども像』を意識して具体的な内容を盛り込むようになった。初めは「具体的に記入するってどうすればいいんだろう？」と何度も試行錯誤していたが、子どもの姿を丁寧に見取り、実践する中で“こんな保育をしたいな”“こんな風に育って欲しいな”という思いが出てくるなど、変化が見られるようになった。ねらいを具体化したことで、保育内容も明確になり、環境構成や保育者の援助など、日々の保育に活かされるようになってきている。

◇記入内容より（一部抜粋）

<令和4年度 1歳児8月月案>

ねらい ○保育者や友だちと一緒に夏の遊びを楽しむ



<令和5年度 1歳児8月月案>

ねらい ○水しぶきや水の冷たさなどの感触の気持ちよさを保育者や友だちと共感し、プール遊びや水遊びなどの夏ならではの遊びを楽しむ

<令和4年度 4歳児11月月案>

ねらい ○心地よい気候の中で、友だちと存分に体を動かして遊ぶ楽しさを味わう

○友だちと色々な遊びを楽しみ、言葉を交わしたり一緒に考えたりしながらかわりを広げる

○身近な秋の自然に触れたり自然物を使って遊んだりすることを楽しむ



<令和5年度 4歳児11月月案>

ねらい ○自分の思いを話したり相手の思いにふれたりしながら、友だちと一緒に鬼ごっこやリレーなどのルールのある遊びを楽しむ

○友だちと一緒に遊びに必要なものを考えたりつくったりしながら共通のイメージの中で遊ぶ

○草花や木の実、虫などの秋の自然に触れたり遊びに取り入れたりしながら遊ぶ

（２）きらりん実習生企画について



抽選の様子

昨年度、実習生になって他のクラスを見学できるという大好評の企画を今年度も引き続き実施した。日頃同じ園にいてもなかなか他のクラスの様子をゆっくり見学することができないので、この機会にとエントリーする保育者が続出し、順番を決める抽選を行った。他のクラスの保育を見ることで学びも多く、保育者の言葉のかけ方や見取り、連携など、たくさん感想に表れていて、自身の保育の中で実践に活かしながら、園全体の保育の質の向上につながっている。

〈実習体験アンケートより〉

- どのクラスにも共通していることは“笑顔”でした。クラス内で違うことをしていても、それぞれが笑顔で楽しんでいる様子をみて心があたたかくなりました。保育者も子どもの目線に立ち、目を見ながら話をしたり、子どもが気づけるような言葉かけをしていたりと工夫をたくさん見ることができました。(2歳児担任)
- 担当保育者が子どもの様子をしっかり把握したうえで他の担任にも伝達していて、連携が重要だと思いました。(4歳児担任)
- どの先生方も子どもの気持ちを受けとめたり共感したりしながらあたたかい優しい言葉かけで子どもたちが安心して楽しく過ごしているなと感じました。(一時預かり担任)

(3) 園内学習会で人権意識を磨く

『思いやりシート』の実践から見えてきた“輝いてきた子どもの姿”

※思いやりシートとは、日々の保育の中の子どもの姿から“思いやりのある見取りや保育者の言葉かけ・かかわり”の視点で捉え、記録したシート



1歳児保育者の思いやりシートより

～保育者の見取りや言葉かけ、かかわりの変容～

5月	◇子どもの姿 ☆思いやりのある見取りや保育者の言葉かけ・かかわり	★輝いてきた子どもの姿
10月	◇遊びを楽しんでおり、トイレに誘っても行きたがらない ☆「おいで」と声をかけるだけではなく、子どもの傍に行き、気持ちに寄り添い「一緒に行こう」と手をつないで一緒に行く	★友だちがトイレを嫌がっている時に、自分が保育者にしてもらったように友だちの近くに行き「行こう」と声をかけて手をつないで一緒に行く姿がある
	◇思い通りにできず、イライラすると「ウー、アー」と声を発してアピールするようになる。声を出して笑い「アー！」と指をさして何かを伝えようとし、発語が増えてきている。まだまだ言葉が出ない分、咄嗟に嘔もうつすることもある ☆その都度、本児の気持ちを「嫌やったな～」と受けとめながら、相手の思いも繰り返し伝えていく。本児の思いを言語化し、簡単な言葉に置き換えて伝えることを繰り返し、発語を促している。	★「いただきます」「ごちそうさま」の挨拶をしようと声をかけても、手を合わせる真似だけだったが「す!」「ま!」など語尾を自分なりに言うようになったり、絵本を保育者に渡し「よんで」と言えるようになったりしている

保育者の変容

- ・1歳児保育者の5月と10月の実践を比べると、10月の◇子どもの姿の波線の部分には子どもの様子が具体的に書かれ、なぜその行動をするのかや子どもの発達段階に沿った『子ども理解』が書かれている。また、☆思いやりのある見取りや保育者の言葉かけ・かかわりでは点線の部分のように、本児の気持ちを受けとめ言語化し、相手の思いにも気づけるように言葉にして繰り返し伝えていく。保育者は肯定的に子どもたちの姿を受けとめ、思いや気持ちを代弁しながら、言葉の獲得につなげ友だちとのかかわりを楽しめるように援助している。毎日の生活の一瞬一瞬を大事に保育し、よりよい成長を支える姿に変容してきている。

成果

- ・学習会で『思いやりシート』を用いた交流会をすると、保育者たちが活き活きと嬉しそうに子どもの話をし、互いの実践に耳を傾ける姿が見られた。また、保育で困っていることを経験年数の違う保育者からアドバイスをしてもらったり、子どもの姿を色々な角度から見取り意見を交流したりすることで、自分一人では気づかなかった子どもの姿を見取ることができた。
- ・学年の保育者集団で、子どもへのあたたかい思いやりのある見取り方を共有し、保育に活かすことができた。また、保育観や子どもの見取りの本音の部分についても、互いの意見を伝え合い、理解し合う貴重な時間になった。



5歳児保育者の思いやりシートより

～保育者の心もちの変容、子どもたちの変容～

5月

◇子どもの姿 ☆思いやりのある見取りや保育者の言葉かけ・かかわり	★輝いてきた子どもの姿
◇大切につくった指輪がなくなり、振り返りの時間になっても気持ちが落ち込み別の場所でうずくまっているA児。 ☆<u>なぜ落ち込んでいるのか、どうして欲しいのかありのままの姿を受けとめじっくり話をきく。</u> ☆振り返りの時、1番にA児の思いをみんなに伝える場面をつくった。 ◇A児は友だちが持って来てくれた物が自分の物ではないと「これじゃないし!」と投げ返してしまう姿もあった。 ☆<u>A児のありのままの姿を受けとめつつ、A児の気持ちを周りの子どもに代弁し伝えていく。</u>	★振り返りで「見つけたら教えて欲しい、妹にプレゼントしたかった大事な指輪」ということをみんなに伝え、すっきりとした表情になりその後のクラス活動に参加した。 ★給食後、B児がA児の所へ行き<u>色や形を何度も確認し、ずっと探していた。</u>B児の姿を見てC児・D児も来て<u>探す友だちが増えていった。</u>



保育者の
心もちの
変容

- ・ありのままを受けとめる
- ・じっくり話をきく
- ・保育者が思いやりのあるかかわりのモデルになるようにする
- ・優しくしてくれた子どものことを保育者が認める
- ・うまく言葉にできない気持ちを代弁して伝える
- ・肯定的に受けとめ、認める
- ・保育者同士の連携をしっかりと取る

8月

◇女兒たちがままごとをしている所にE児が来て、上靴のままとシートを敷いた上を歩き、ままごとの道具を蹴ってしまった。するとF児が「Eちゃん粘土がしたいんだね」と気持ちを読み取り声をかけた。その後、E児が粘土ケースを持って机に向かう姿を見て、F児は粘土板をG児は道具セットを机まで運び、再び自分たちのしたい遊びに戻っていた。 ☆子どもたち自身で、友だちの姿から思いを汲み取って助け、見守る場面が増えてきた。④「Eちゃん粘土したかったんやな」⑤「気づいてくれてありがとうね」と<u>行動した子どもに対して言葉をかけ優しい姿を認めていく。</u>	★自分で考えて友だちの気持ちに気づいたり助けたりする姿が見られるようになってきた。 ★大切な物が壊れてしまっても、<u>すぐに怒るのではなく、相手の背景を知ろうとしたり、許したりして考えて接することができるようになってきた。</u>
---	--

子どもたちの変容

安心して自分の思いを出す

互いに尊重し
合う言葉かけ
をする



友だちの気持ちに気づいたり
助けたりする

友だちの姿を肯定的に捉える

友だちの背景や状況を知り、
判断してかかわろうとする

成果

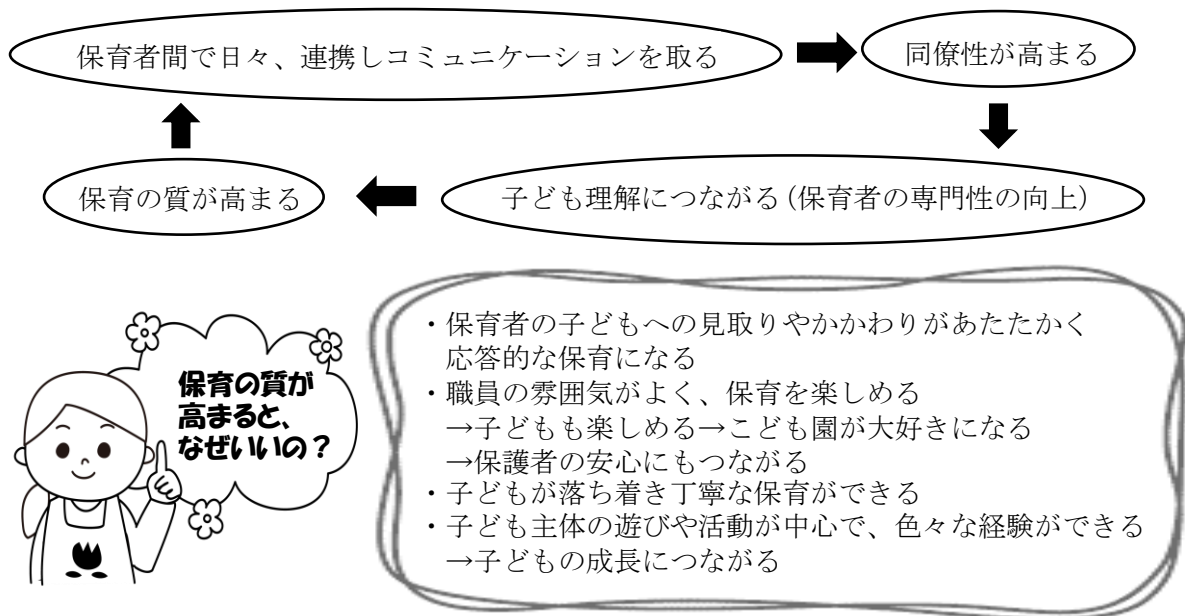
- ・保育者が、友だちの気持ちに寄り添って行動した子どもを認め、よかったかかわりを具体的な言葉にして伝えることが、子どもたち自身で気づき助け合える関係につながった。
- ・保育者が、心を込めて子どもたちの思いに寄り添い理解しようとすることで、保育者と子どもたちとの信頼関係は深まった。常に子どもたちの姿を肯定的に受け入れる保育者の存在があり、ありのままの自分を出せるクラス集団があることで、生き生きと友だちと思いを出し合ったり助け合ったりしてつながり合う子どもたちの姿になってきている。

（４）きりりん会議で同僚性を高める

１年目の研究から、保育者自身の人権意識を高めることをねらいに“語り合う時間の保障と同僚性を高めること”ができるよう取り組みを進めてきた。２年目は“思いやりのある視点で同僚と語り合いながら保育を積み重ねていき、園全体で人権意識を高めること”をめざして、学年で話し合ったことを発信する機会として月に１回きりりん会議を行っている。

第３回の学習会（６／２８）に『同僚性について ～難しく感じること、大切だなと思うこと、心がけていること～』について全学年の職員と話し合った。そして、第４回きりりん会議（７／３）では、『保育者同士のかかわりで大切だなと思うこと、心がけていること』を出し合い、それがどうして大切なのかを確認し合った。

大切だなと思うこと	心がけていること
・報連相 ・職員の年齢に関係なく話し合う ・分からないことを何でもきいて寄り添う ・得手不得手を補い合う ⇒助け合いの精神 ・子どもの様子、生活、遊びのポイントなど共有し、相談して子どもの好きな遊びを準備する ・意見を言いやすい雰囲気づくり ・何でも話せる、しんどいことも言い合える関係性の構築 ・相手を尊重する ・色々な話を交え、伝え合いながら楽しむ ⇒互いを知り話しやすくなる ⇒職員の関係性が子どもに伝わるから ・してもらって当たり前と思わず、自分から動く ⇒感謝の気持ちを常にもつ ⇒「ありがとう」と言葉にして伝える	・保育者が保育を楽しむ ・分からないことをきいて教えてもらう。 分からないことに寄り添う ・楽しい雰囲気を職員同士がつくり合う ・リーダーが誰であってもその時に気づいたことは提案する。目の前の子どもたちが楽しめるように、互いの引き出しも増やせるようにする ・「任せとき！」と担当が安心できるような言葉をかける ・その日のことはその日中に話をして、次の日の保育につなげる ・家族よりも長い時間を過ごす相手だから、その人のよい所を見つけて気持ちに寄り添う



上記のように、きらりん会議で保育者同士も“思いやり”をもってかかわることで、子どもたちに想像以上の影響があることが分かり、同僚との連携やコミュニケーションをさらに大事にしてかかわっていかうという気持ちが高まった。

考察

- ・『思いやりのある見取りや保育者の言葉かけ・かかわり』という大切にしたい視点を意識しながら研究を進めていく中で、保育の中で常に子どもに対する自分のあり方はどうかという客観的な目を持ち保育にあたることができた。そして、自分たちなりに大切にしたい『きらりんワード』が見えてきて、それをモットーとして、保育を積み重ねてきた。振り返り、語り合い、次の保育に活かすという研究の中で、子どもたちの笑顔に出会え、成長を実感することが喜びで、それを分かち合う同僚がいることこそが“保育が楽しい”と感じる瞬間であった。
- ・研究テーマに向かい『大切にしたい視点』に立って研究を進めてきた姿勢こそが、保育者の意識の変容である。きっとこの大切にしたい視点を見出したプロセスと子どもの変容こそが、これからも保育に携わっていく私たちのポリシーとして刻み続けることになると思われる。自分たちがやってきたことが子どもの心の根っこを育て、豊かな成長につながれたと実感できたことが大きな研究成果である。
- ・子どもの育ちに大切なことや同僚性に必要なことなど、分かっているもうまくいかない時もある。子どもたちにとっての最善を考え一生懸命にかかわっていても心が折れそうになることもある。こういったことは日常の保育にあることなので、そこをどう乗り越えるか、自分のモチベーションをどう保つかが大切になってくる。まずは周りが同僚の心の変化に気づくこと、相手の話に思いやりをもって傾聴すること、励まし支え合うことを大切にする。この姿勢が乗り越えるカギとなることが分かった。この研究の中でそのように乗り越えていく姿もたくさん目の当たりにした。まさにチーム力が大切であり、尊重し合い支え合いながらチーム力で保育を進めていくこともこの研究で学んだ。

2. 安中ひかりこども園の魅力発信 ～研究を通して見えてきたこと～



2年間の研究を受けた時は「やっていけるの?」「難しいんじゃない」など不安な思いが
ありましたが「とりあえずやってみよう!」「何とかなるよ!」という肯定的な言葉に置き
換え研究がスタートしました。

そして、研究を進めていくごとにキーワードが生まれ、それを意識しながら保育すること
で、子どもや遊びが輝き始め保育がおもしろくなるという好循環な状態が生まれていきま
した。

(1) きらりんキーワードで、保育力アップ!!



学んで実践してきた代表的なキーワードをご紹介します。

『育てたい子ども像』を考える

3月には、“どういう子どもに育ててほしい
か”“どんな関係で遊べるようになってほ
しいのか”を考え、明確化していくことで、
保育の道筋が見えてくる

保育者の6つの役割とは…

- ・共同作業者
- ・遊びの支援者
- ・共鳴者
- ・よりどころ
- ・モデル
- ・理解者

(幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説より)

子どもが何に楽しいと感じているか

“見取る”ことが大事

子どもたちが集まって遊んでいても、楽し
さはそれぞれ違う。その内面を見取ること
で、援助や環境づくりは変わる

つもりの違い

同じ遊びをしているようでも“つもり”に
違いがある。つもりを見取り、一人ひとり
が“どう”つもり“で遊んでいるかを理
解し寄り添い、言葉をかけ環境構成す
るかが大事になる

“できた”ことだけがきらりんポイ ントではない。それに気づけたこと も、きらりんポイント!

“友だちの素敵なおところ”“困っているところ”
などにも気づけた子どもも、きらりんポイ
ント! それを逃さず認めていくことが大事
である

選択肢を多くし、

子どもが選べるようにする

イヤイヤ期など、大人が提示した選択肢
から自分で決めて気持ちに折り合いをつ
けるようになる。保育者が選択肢をたくさ
んもっていることで、その言葉を子どもが
違う場面で使うことができるようになる

思いに寄り添い共感し、 愛着関係を築く

子どもの気持ちに寄り添い、日々丁寧に
かわかることで情緒が安定し、遊びに向
かうようになる

ねらいは、具体的に…

自分たちで描いた『育てたい子ども像』に向
け、3月には達成しているようにひと月ひと
月、具体的に立てることが大事!
また、この遊びがどこに向かっていくのかや
発展するのかを想定してねらいを立てるこ
とが必要である

(2) ダイアリーからの思いやりエピソード

研究で大切にしている“思いやり”の視点が、日々の『ダイアリー』にも盛り込まれ、一人ひとりの保育者が保育に対して真摯に取り組む“心もち”がちりばめられています。

＜令和5年9月14日 3歳児のダイアリーより＞

A児、B児、C児は、最近互いのマイナスな面を伝えにくることが多い。そこで、保育者も入って話をする。A児「Cちゃんは好きやけど、Bちゃんは嫌い」と話す。理由を尋ねると「私のすることをあかんとやってくる」と言う。それをきいたB児は、「私には優しい気持ちもあるけど、怖い気持ちもあるねん。でもAちゃんのことは好き。優しいし、いつも遊んでくれるから…」と話す。A児は、B児が自分のことを嫌いだと思っていたようでB児の話をきいて少し表情が和らいだ。今後も3人の様子を見守りながら、トラブルを成長のきっかけになるように援助していきたい。

(3) 先生たちが感じる

安中の魅力ベスト3

2年間の研究を通して先生たちが感じている本園の空気感を、アンケート形式で書いてみました。みんなで一緒に研究を進めてきたからこそ出てきた意見もたくさんありました。



園長の経営ビジョン
からも“魅力発信”

八尾市立安中ひかりこども園 経営計画概要 (2023年)
「自らえがく経営ビジョンについて」

園長 岡内 郷子

近年、日本の子どもたちの貧困率が懸念されています。貧困は、経済的な貧困だけでなく、裕福な家庭であっても人間関係が乏しかったり、多様な経験の機会が限られていたりするもの「貧困」に陥ります。その貧困の解決策は、園が質の高い幼児教育を提供することでサポートできると言われています。

2023年4月に「こども家庭庁」も新設され、0歳から18歳の子どものサポートしていく体制の構築もできつつあるようです。社会全体が子どもに対して興味関心をもっている今のチャンス！先生たちが、日々大切にしている保育内容をぜひ保護者や地域の方々に情報発信していきましょう。

合言葉
思いやりからの～
魅力発信！！



“安中の魅力”を
発信していきましょう？

研究で学んでいることを、
情報発信していきましょう！！

令和4年度5年度の「幼児教育研究」で学んだことを、園内だけでなく研究会参加者や近隣の小中学校の先生方、地域の方たちにも情報発信していきましょう。

『思いやりのある見取りや保育者の言葉かけ・かわり』が、どのように子どもたちの育ちに影響していくのか！？を軸にして育ってきた子どもの姿を見える化をして、安中の魅力を発信していきましょう。

見える化

＊見えにくいといわれている幼児教育・保育の可視化に努め、保護者に安心感や期待感をもってもらうように努力しましょう。
・担任からのメッセージボードとすぐすぐネットの活用
・個人連絡ノート・園だより・保護者より・食育ボードと食育だより・ひかりこども園ニュース(園長より)
・玄関モニター・ホームページ
・学級懇談会・個人懇談会 など

なぜ、幼児期に遊ぶのか？
6歳までに脳の神経の85%が出来上がる。
だから幼児期の子どもの、豊かな想像力、身体性、思いやり、好奇心、探究心が、その後の人生で、神経回路に様々な刺激を与え回路をさらに張り巡らすように多様な形成していく。大人になって気持ちを強くもてるか、ものごとをうまくこなせるか、幼児期に遊びをさせているかどうか、その子が気持ちを強くもてるかが、幼児期にあること、わかっている。

ベスト1 ・あたたかい雰囲気でのみんな笑顔

ベスト2 ・元気いっぱい明るい

ベスト3 ・助け合い認め合う関係

(その他) ・発言する力がある

・学ぶ意欲が高い

・先生たちの仲がよい

・ウサギのきなこに癒される

など



5月の学習会で『2023年度の園の経営ビジョン』について園長より話があり職員間で思いを共有しました。

☆今年度の合言葉は、“思いやりからの魅力発信”です。この研究を通して学んでいることを保護者や地域の方々に情報発信していきましょう。

☆子どもたちのよいところをドンドン見つけてそれを言葉にして子どもに直接伝えましょう。

☆先生たち同士もきりりんポイントを見つけて互いに褒め合しましょう。
(1日1きりりん)

☆あたたかい応答的な言葉かけをしましょう。

☆「〇〇してはダメ」ではなく「〇〇してみよう」「どうすればいいかな」という未来志向型の言葉かけにしましょう。

☆安心して働くことができる職場づくり。
「助けて」が言える仲間づくり、思いやりをもった言葉をかけ合うなど同僚性を育んでいきましょう。



3. おわりに

研究って「難しそうやな〜」「指導案ってどうやって書くの？」と苦手意識や悩みをもっている職員の心を軽くし、振り返った時に「なるほど…」「ああ、そうか！」「やってよかった」など、大変な中にも学びがあって経験してよかったと思えるようにしたいと始まった研究です。

研究1年目“一人ひとりを大切にしたい保育をテーマにしていこう”と始まりましたが「でも、具体的にはどうすればいいの？」となったことも今になっては懐かしく感じます。まず初めに、目の前にいる子どもたちがこれからの時代を生きていくうえで必要な力を身につけていくためには、私たち自身が人権感覚を磨き、子どもを“肯定的に見取ること”“あたたかいまなざしでかかわること”“心のよりどころとなること”などを大切にしたい『あたたかくて思いやりのある保育』を進めていくことを職員で共通理解し、研究を進めることにしました。

合言葉を『思いやり』とし、同じ思いで保育を進めていくうちに、自然と園内があたたかい雰囲気となり職員同士でも子どもを真ん中にした話や笑い声があちらこちらで聞こえてくるようになってきました。

そして、何より、研究協力者である常磐会短期大学の保田先生に「荷が重いけど一緒に頑張ります」とおっしゃっていただき、園内研究会や学習会にてご講話いただくたびに、いつも私たちの心が軽くなるようなアドバイスがありました。そのお話の中のキーワードが研究の軸となり私たち自身の研究の『きらりんワード』が誕生し、より楽しく研究を深められました。

今では子どもたちの姿からも、そのような“思いやりの姿”があちらこちらで見られ、ねらいをもって保育をすることの大切さを実感しています。保田先生がおっしゃっていた「子どもの話を休憩室でできる園は素敵だね」も実現できています。

そして、この研究冊子を作成する時も、ただやってきたことを羅列するだけでなく、手に取ってくださった方々が「なるほど。自分たちもやってみようか！！」「保育っておもしろい！研究って楽しそう！」と読んでいただける冊子にしたいと思い作成しました。この冊子が、今後の八尾市の幼児教育、並びに幼児教育に携わる皆様の一助としてお役にたてれば幸いです。

最後になりましたが、一緒に頑張ってきた安中ひかりこども園の職員の皆さんを誇りに思っています。

令和6年1月30日

園長 岡内 郷子

あったかさと、保育がつながる楽しさを！

常磐会短期大学

非常勤講師 保田 維久子

最初、このお話をいただいた時に、2年間の研究に私が何かできることがあるのか…ホントに私でいいのですか？という問いをずっと続けていました。例えば『あったかさ』というキーワードはとても素敵な言葉ですが、反面、具体的にどのようなことなのか分りにくい所もあります。なんとなく、笑顔でいても、お互いを大切にしておかかわって過ごしていても、表面上は『あったかい』と言えるのではないかと思ったのです。なので、どんなお話をすればいいのかとても悩みました。多分、最初にお話しさせていただいた時は、分りにくい話になっていたのではないかと思います。(すみません💦)

少し先生方と思いがかみ合ってきたのは、公開保育の中でだと思っています。具体的な子どもの姿から観察をし、具体的な保育の方向など、子どもがそこにいて、その姿を先生方と共有してお話しできたことで、私自身も『あったかい』の具体的な目標をもつことができたように思います。

保育をしていると保育者が子どもたちに伝えたいことがたくさんあって、どうしても、保育者がしたいこと、保育者が困ることが優先されてしまいます。私も実践をしてきましたから、とても共感できることです。でも『人とかかわり』を考えるとお互いの思いを尊重することがとても大事です。つまり、保育では子どもの思い、困っていること、楽しんでいることを、子どもの視点で捉え保育していくことが大切だということが分かります。『あったかさ』とは、今、子どもの表現しているその姿から実際に子どもが何を楽しみ、何に困っているかを考えて保育していくことだと思うのです。それを『思いやりのある見取り・言葉かけ・かかわり』と名付けてもらって2年目がスタートしました。

乳幼児保育では、こうしたらいい、これが正解ということがはっきりとはありません。それは、子ども一人ひとりが違って、その一人ひとりがクラスを、園を構成しているからです。2年目の初めに先生方が考えた『子ども像』も、足りないところも、思い違いしていることも、もしかしたらあったかもしれません。でも、2年目の公開保育の中で、確実に「こんな子どもになって欲しいからこのねらいで、ここが気になっているから、こんな遊びを考えてきた」という先生方の思いと、具体的な取り組みが伝わってきました。公開保育に行くことが本当に楽しみでした。

子どもたちの視点で、子どもたちが感じているおもしろさを活動に！

そうすると、どうですか？“こうやってみよう”“もっと、こんなことを考えてみよう”と保育者が意欲的に主体的に、保育しているのではないのでしょうか？

保育は本来楽しいものです。子どもと一緒に想定外のことが起こるからおもしろい。それに気がついて保育をつくっている姿を、先生方はお互いに認め合って、きらりんポイントとして積み重ねてこられました。『あったかさ』を色々な角度で論議してきたことで、保育者自身も「保育がつながり楽しさを感じられるようになった」としたら、それこそがこの研究の一番の成果だったと思います。保育を深めることは、つらいことだけではなく次の保育につながることを実感しました。そこに参加させていただいて楽しかったです。そして、勉強させていただきました。ありがとうございました。

研究協力

保田 維久子
(常磐会短期大学非常勤講師)

研究同人

安中ひかりこども園職員一同

表紙イラスト：柳沢 亜依（1歳児担任）

令和4・5年度 幼児教育研究

かけがえのない一人ひとりを大切に
～あったかさと心つながるひかりっこ～

＜ 2年次 研究報告 ＞

八尾市立安中ひかりこども園

令和6年1月 発行 (R5-150)

【発行】八尾市

八尾市教育委員会

〒581-0003 八尾市本町一丁目1-1

【TEL】072-991-3881（代表）

